法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

研究展望　2019年（平成31年・令和元年）

表，きよし / 高橋，悠介 / 深澤，希望 / 竹内，晶子 / 中司，由起子 / 横山，太郎 / 伊海，孝充 / 宮本，圭造

(出版者 / Publisher)
法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究
(巻 / Volume)
47
(開始ページ / Start Page)
211
(終了ページ / End Page)
245
(発行年 / Year)
2023-03-25

研究展望　二〇一九年（平成三十一年・令和元年）

二〇一九年に刊行された能・狂言の単行本、および雑誌等に発表された論文を取り上げる。例年と同じく、単行本（表きよし）、資料研究（宮本圭造）、能楽論研究（高橋悠介）、能楽史研究（高橋悠介）、作品研究（中司由起子・深澤希望）、狂言研究（伊海孝充）、その他（横山太郎）、外国語による能楽研究（竹内晶子）に分類し、分担執筆をおこなっているため、全体を展望するというより個別の論の紹介となっていることをお断りしておく。また、重要な論稿を見落とすなどの遺漏もあろうと思う。ご寛恕を願う。

【単行本】

『上杉家伝来の能面・能装束』（東京国立博物館編。B5判変型132頁。東京国立博物館。1月。一五二七円）

1月29日から3月31日まで東京国立博物館で行われた特集陳列の図録。この特集陳列では東京国立博物館が所蔵する米沢藩上杉家伝来の面・装束が展示された。第1章「能狂言面」では能面32点の写真と解説、第2章「能装束」では唐織・厚板など93点の能装束の写真と解説が掲載されている。浅見龍介・川岸瀬里「上杉家の能面　収集と管理」や「上杉家の能に関する年表」なども収録されており、上杉家と能の関わりやどのように能面・能装束を入手・管理していたかがわかるようになっている。

『新作能オセロ』（泉紀子編。B5判200頁。和泉書院。1月。六〇〇〇円）

二〇一三年に初演されその後も数度にわたり上演されている新作能〈オセロ〉について、様々な角度から考察を加えた書。「第一章・新作能《オセロ》」では〈オセロ〉の梗概や詞章など基本となる事柄を紹介する。「第二章・新作能《オセロ》創作のプロセス」では辰巳満次郎・野村萬斎・大倉源次郎などこの作品の創作に関わった役者たちの思いを紹介する。「第三章・新作能《オセロ》を考える」では研究者や翻訳家などがそれぞれの立場から〈オセロ〉を考察している。「第四章・資料篇」も含めて、この作品の特色を十分に知ることができる内容となっている。付属品として日本語・英語・中国語で上演された映像が収録されたDVDがある。

『国立能楽堂開場35周年記念企画展　囃子方と楽器』（国立能楽堂事業推進課調査資料係編。A4判変型128頁。日本芸術文化振興会。1月。二五五〇円）

1月5日から3月25日まで国立能楽堂で行われた展示の図録。囃子方が所蔵する史料や道具類など109点が展示された。図録には「伝えられた史料」として囃子伝書や能組9点、「描かれた囃子方」として絵図4点、「草創期の楽器」として小鼓胴・大鼓胴18点、「伝世の名器」として能管・小鼓胴・鼓箱・太鼓77点の写真が掲載されている。宮本圭造「囃子方諸流の成立と系譜」、高桑いづみ「能の囃子の成立過程」も囃子の理解に役立つ内容となっている。

『描かれた能楽　芸能と絵画が織りなす文化史』（小林健二著。A5判360頁。1月。吉川弘文館。八〇〇〇円）

能・狂言を題材とした絵画資料の考察を通して、当時の能楽の芸態などを解明しようと取り組んできた研究の成果をまとめたもの。「Ⅰ能楽絵画の諸相と資料的意義」では、まず国立能楽堂所蔵『百万絵巻』の描写を型付などの文献資料と照らし合わせて検討し、絵画資料が能の実態を探る有力な手掛かりとなることを明らかにする。また宇和島の伊達文化保存会蔵『能絵鑑』から演出の変遷を考察したり、国文学研究資料館蔵『狂言絵』から古演出を検討したりするなどの論が展開される。「Ⅱ近世前期における能楽の絵画的展開」では能の内容を絵巻などにした物語絵に注目し、物語絵が制作された目的やどのように受容されたのかを検討する。「Ⅲ能と物語絵の相互関係」では〈大江山・源氏供養・善界〉などの作品が絵巻を典拠として作られたことを論証していく。一方で『かみよ物語』のように能をもとに絵巻が作られるケースがあることも明らかにされる。長年にわたり絵画資料を能楽研究に活用する取り組みを行ってきた著者ならではの緻密な考察が展開される書であり、こうした研究によって絵画資料が注目されることで、ますます絵画資料によって能の演出研究などが進展していくことが期待される。

『歌舞能の系譜　世阿弥から禅竹へ』（三宅晶子著。A5判344頁。2月。ぺりかん社。五八〇〇円）

平成13年の『歌舞能の確立と展開』刊行以後発表した歌舞能に関する論文を体系的にまとめた書。世阿弥と禅竹に焦点を当て、作品を徹底的に分析することで、能作者としての二人の特色やその背景となる時代的特色を明らかにする。「第一章・世阿弥と禅竹」では〈砧〉と〈野宮・定家〉を取り上げながら、世阿弥と禅竹の個性の違いを論じている。「第二章・創世期の能の魅力」では、世阿弥時代の夢幻能が個別的な特色を持っていたこと、禅竹は夢幻能の類型化を推し進めたことを説く。「第三章・世阿弥の言語感覚」は〈砧・融〉など様々な曲を取り上げながら能の詞章の個性や役割を検討している。「第四章・世阿弥における能楽論と能作の実態」は世阿弥の能楽論と世阿弥作の作品との関連を具体的に論じたも

の。「第五章・禅竹の世界」では世阿弥とは異なる特色を持つ禅竹の作風を考察している。緻密な分析を通して世阿弥や禅竹の歌舞能の特色を考察しており、禅竹時代までを能の草創期と位置付けるべきことなど、新たな視野を与えてくれる研究書である。

『中世文学の思想と風土』（石黒吉次郎著。A5判366頁。2月。新典社。一〇六〇〇円）

思想・風土という二つの観点から中世文学を考察した論考を集成したもの。信仰と芸能に関する論が中心で、多くの論考の中に能への言及が見られる。「心の澄む舞」は能における舞の役割を考察したもので、「山姥」や「姨捨」のように主人公の女が舞によって宗教的に神聖な世界へと昇華してゆくがやがて煩悩の世界に戻る作品や、「江口」「東北」のように聖なる存在が舞によって聖性を高めていく作品があることを指摘する。「東国と謡曲」では東国を舞台とする能にどのような風土の影響が見られるかを検討し、能作者が現地の事情にどの程度精通していたかを考察している。このほか伏見稲荷・白山・立山・神田明神の信仰をめぐる考察にも能への視点が含まれており、東北地方と中世文学をめぐる考察にも能が含まれている。

『復元江戸城能舞台と弘化勧進能』（法政大学江戸東京研究センター編。A4判184頁。法政大学江戸東京研究センター。3月。非売品）

法政大学デザイン工学部建築学科の高村雅彦教授を中心とする高村研究室能研究班による研究成果報告書。儀式的な能楽の常設演能空間としての江戸城能舞台と、民衆も観ることが許された興行的な能楽の仮設演能空間である弘化勧進能の舞台・見所などを考察している。能楽研究所が所蔵する舞台の指図や舞台に関する文書、絵巻など様々な資料を駆使しながら舞台や演能空間の復元図を作成し、模型やコンピューター・グラフィックにより実感できる形に復元していく（付属のDVDでコンピュータ・グラフィックによりいろいろな角度から舞台や見所の様子を確認することができる）。江戸城の舞台は本丸御殿の表舞台だけでなく奥舞台や二の丸御殿の舞台まで考察に含められており、弘化勧進能については舞台だけでなく見所や楽屋など演能空間全体に目配りがなされている。見所の位置による見え方の違いや音の伝わり方についても考察されており、能舞台を考える上で有意義な示唆を多く与えてくれる。

『笛廼舎閑話』（中谷明著。四六判192頁。檜書店。3月。一六〇〇円）

雑誌『観世』昭和61年8月号から平成10年12月号に掲載された随想36篇に、「戦争末期から終戦、復興へ」の章を書き加えたもの。随想の内容は多岐にわたるが能の話とうまく絡まっていて楽しく読める。著者の周囲への細かな目配りが感

じられる文章である。追加された章では太平洋戦争前後の生活の様子や東京大学卒の笛方が誕生する経緯などが記されている。

『能楽　宝生流』（前田尚廣編。B5判44頁。3月。宝生会。一五〇〇円）

宝生能楽堂創建40周年記念誌。宝生の舞台、宝生の芸風（西野春雄）、公益社団法人宝生会とその事業、宝生の名面と装束、宝生流職分紹介、歴代宗家の姿、先人たちの舞台（羽田昶）、宝生流小史といった内容。現在の宝生流の様子を概観できる冊子である。

『近世諸藩能役者由緒書集成　上』（宮本圭造編集。A5判460頁。3月。野上記念法政大学能楽研究所）

能楽研究所が刊行してる能楽資料叢書の5。近世諸藩で活動した能役者の由緒書を集成したもの。本冊には徳川御三家（名古屋藩・和歌山藩・水戸藩）と、北から南へ弘前藩から大聖寺藩までの分が収録されている。藩に関わる人物の資料は藩によって作成方法も同一ではなく、その残存状況にもかなりの違いがある。由緒書・系譜・分限帳など各藩の藩制資料を博捜することにより、その藩で活動した役者がどのような人物だったかがわかるようになっている。諸藩の能楽への取り組みを知る手がかりにもなり、諸藩にどのような資料が残されているかを知ることもできる。

『夢幻にあそぶ　能楽ことはじめ』（松村栄子著。四六判192頁。4月。淡交社。一四〇〇円）

日本文化に深い造詣を持つ作家による能楽入門書。「第一章・ことはじめ」では自身と能楽との関わりを紹介、「第二章・物語のうまれたところ」では典拠となった古典文学作品と能との関係や新作能について、「第三章・お能の演じられる場所」では能楽堂の特徴と黒川能が紹介される。「第四章・こんなときは、こんなお能」は「美しいお能を観たいとき」や「幽玄を感じたいとき」といった形でそれにふさわしい作品を紹介する。優しい語り口で能の世界に読者を誘う書である。

『茂山逸平　風姿和伝　ぺぺの狂言はじめの一歩』（中村純構成・文・編、上杉遥写真。A5判168頁。6月。春陽堂書店。二〇〇〇円）

大蔵流狂言方茂山逸平と息子の慶和の活動を追いながら、茂山家の狂言の特徴や若手狂言師の思い、狂言師の子供が狂言の道を歩み始める様子などを紹介する。太郎冠者が登場する作品、女性が活躍する作品、狂言師にとって難関である〈釣狐〉などの作品の紹介もあり、狂言を身近に感じられる入門書となっている。

『狂言を生きる』（野村万作著。A5判312頁。6月。朝日出版社。五〇〇〇円）

米寿の節目に自身の狂言への取り組みをまとめた書。東京新聞の連載やファンクラブ小冊子に掲載されたものを中心としながら手を加えている。第一章「狂言の家」では家族との関わりを述べ、第二章「狂言修業の芸話」では「靭猿」から「釣狐」「花子」といった大曲に至る修業の様子が取り上げられる。第三章「万作狂言名作選」は「末広かり」「萩大名」など13曲の特徴や見どころを紹介、第四章「新しい試み」では「楢山節考」など新たな作品への挑戦の様子が語られる。第五章以後は「狂言の種々相」「海外公演と現在」「心に残る人々」「狂言の未来へ」といった内容で、狂言への取り組みを様々な角度から説明するとともに、これからの狂言への思いが綴られている。

『幕末期狂言台本の総合的研究　和泉流台本編1』（小林千草著。A5判514頁。7月。清文堂出版。五四〇〇円）

成城大学図書館蔵『狂言集』14冊の総合的研究で、平成28年刊行の大蔵流台本編、平成30年刊行の鷺流台本編に続き、和泉流台本の考察が行われている。第一章から第四章では甲本を取り上げ、「ぜあ」という語の使用実態や性格、諸曲のセリフ展開上の特色、〈猿座頭・籔屑〉の性格や用語の検討が行われる。第五章から第七章は乙本を対象とし、「ぜあ」の使用実態や〈岩橋・蜘盗人〉の考察が展開される。第八章は甲本・乙本以外の本の考察である。

『中世日本文学の探求』（日下力著。A5判420頁。10月。汲古書院。九五〇〇円）

『平家物語』や『平治物語』などの軍記文学の研究者である著者の様々な論考を集成した本。「二一　軍記物語と能」では、まず「清経」と「通盛」という夫婦が登場する修羅能に焦点を当て、『平家物語』との描き方の違いから修羅能に仕立て上げるための工夫を明らかにする。また「俊寛」と「知盛」については命を惜しむという点に注目し、『平家物語』と比較しながら自己の命への執着の根深さが能では希薄になっていることを指摘する。薄幸の若武者をシテとする「敦盛」「朝長」については、直実の親としての思いが消し去られた「敦盛」に対して「朝長」はシテの長者やワキの傅に父母のイメージが重ねられていると説く。「二二　朝長の影を追う」は朝長周辺の人物に関する考察で、「朝長」前シテの青墓の遊女やワキの嵯峨清涼寺の僧についても考察が及んでいる。

『12人の花形伝統芸能　覚悟と情熱』（中井美穂著。新書判248頁。10月。中央公論新社。九〇〇円）

中公新書ラクレの一冊。アナウンサー中井美穂と古典芸能の演者との対談で、読売新聞に連載されたものから12人を選び、加筆・修正を加えたもの。能楽関係ではシテ方宝生和英、大鼓方亀井広忠、狂言方茂山逸平の3人の分が収録されている。それぞれに自分の育った環境や芸への思いを語っている。

『風姿花伝　創造とイノベーション』（道添進編訳。B6判240頁。10月。日本能率協会マネジメントセンター。一六〇〇円）

世阿弥の『風姿花伝』の特色をわかりやすく伝えようとする書。まず第1部で『風姿花伝』の構成や世阿弥の生涯など基礎的事柄を説明する。第2部では『風姿花伝』の序から別紙口伝までを現代語訳している。第3部は『風姿花伝』に見られる示唆に富む言葉に注目し、その重要性を解説する。『風姿花伝』の論が様々な分野の創造や変革に役立つことをわかりやすく説いている。

『狂言の面』（伊藤通彦著・北澤壯太撮影。A4判96頁。10月。Gmagazine出版社。三五〇〇円）

面打師伊藤通彦の手になる狂言面70点の写真を収めた図録。同じ種類の異なる面を複数収録することにより、一つ一つの面の個性が浮かび上がっている。三宅右近・三浦裕子の寄稿文や、伊藤自身が狂言面について執筆した文も掲載されている。

『令和元年度国立能楽堂特別展　神戸女子大学古典芸能研究センター・神戸女子大学図書館所蔵能狂言絵コレクション』（国立能楽堂事業推進課調査資料係編。A4横変型判106頁。11月。日本芸術文化振興会。二五五〇円）

11月6日から翌年1月17日まで国立能楽堂で行われた展示の図録。堀池宗叱識語本・絵入謡本・能狂言絵巻・能狂言図巻・能狂言画帖など12種の資料が展示された。図録にはそれらの写真が掲載されており、写真を見るだけでも興味深い点が見出されて楽しめる。山崎敦子「神戸女子大学古典芸能研究センターについて」、樹下文隆「堀池宗叱識語本の表紙絵」、小林健二「神戸女子大学古典芸能研究センター・神戸女子大学図書館蔵の能狂言の絵巻と図帖」も収録されており、展示資料についてより深く理解するのに役立つ。

『近江旅の本　近江の能―中世を旅する―』（井上由理子著。A5判128頁。11月。サンライズ出版。二五〇〇円）

近江国を舞台とする能の作品を取り上げ、それぞれの作品のゆかりの地の様子を詳しく説明する。〈蝉丸・関寺小町・自然居士・兼平・巴・源氏供養・望月・烏帽子折・三井寺・志賀・雷電・善界・大会・白髭・竹生島〉の15曲のほか乱曲・狂言にも言及している。能の詞章に登場する地名がどのような所か、現在はどのような様子かを写真を用いて具体的に説明してくれている。

『能面花鏡』（大月光勲著。A4変型判232頁。12月。求龍堂。五〇〇〇円）

面打師大月光勲が打った能面の写真を収録したもの。翁面・女面・男面・尉面・鬼神面・狂言面・創作面70点が収められている。一つの面につき正面だけでなく左右や上・裏な

ど様々な角度から撮影されており、面の表現の豊かさを感じさせる。「能面《若女》制作ノート」では若女の面が作られる過程が詳しく紹介されており、面打ちへの興味が掻き立てられる。

『レバノンから来た能楽師の妻』（梅若マドレーヌ著・竹内要江訳。新書判222頁。12月。岩波書店。七八〇円）

岩波新書の一冊として刊行されたもの。内戦が激化するレバノンを出国して各地を移動するうちに日本で能楽師梅若猶彦と出会い、能楽師の妻としてイベントのプロデュースなどで活躍する様子が描かれる。厳しい状況に屈することなく、満足できる環境を求めてたくましく行動する姿に圧倒される。

『風姿花伝』（佐藤正英校注・訳。文庫判272頁。12月。　筑摩書房。一〇〇〇円）

ちくま学芸文庫のために新たに校訂・訳出し、解説を書き下ろしたもの。日本倫理思想史の立場からする注釈の試みだと言う。『風姿花伝』序から第七別紙口伝までの各部分について、本文・注・現代語訳・補説の形で説明される。注はかなり細かい。『風姿花伝』のほか『夢跡一紙』と『金島書』も本文・注・現代語訳の形で掲載されている。

『世阿弥』（北川忠彦著。A6判232頁。12月。講談社。九六〇円）

昭和47年中公新書刊行『世阿弥』の舞台写真・資料写真を差し替え、土屋恵一郎による解説を加えて文庫化したもの。講談社学術文庫の一冊。世阿弥の生涯や作品、伝書に幅広く目配りしながら世阿弥の業績を冷静に評価する。（表）

【資料研究】

室町期の能楽資料に関する論考は、堀川貴司「「観世小次郎画像（賛）」再考」（『国語と国文学』96-4。4月）の一本のみ。同稿は、観世信光の伝記資料として著名な信光画像賛についての本格的な考察で、現存最古写本と見られる東福寺霊雲院蔵『景徐和尚賛語』の本文に基づき詳細な語釈を施すとともに、その本文の構成、諸伝本の関係など、緻密な分析が繰り広げられる。中でも注目されるのが、前田育徳会尊経閣文庫蔵本に関する解釈で、同文庫蔵「観世小次郎法名宗松号大雅行状」が『翰林葫蘆集』所収本文とは大きく文章が異なる点について、本作が当初は信光の行状記として制作され、後にこれが画像賛に転用された可能性を指摘。同文庫本の末尾に文亀三年十月の制作年時を示す年記があることから、画像賛の制作期はこれよりも後の文亀三年末あるいは翌永正元年まで下る、とする。信光画像賛は、観世信光の生年の重要な示準となっていたが、同賛の制作時期が修正されたことで、信光の生年は通説よりも一、二年下る可能性が出てきた。今後の研究に与える影響はすこぶる大きいと言えよう。

謡本に関する研究が三本あった。竹本幹夫「早稲田大学図

書館所蔵古活字玉屋謡本について」（『早稲田大学図書館紀要』66。3月）は、二〇一五年に古書店の目録に掲載されて注目を集めた古活字玉屋謡本の新出本に関する詳論。ほぼ同時期に印刷された同版本と推定される天理本との細部にわたる比較分析を通して、古活字玉屋謡本の制作背景につき、多くの重要な指摘を行っている。すなわち、新出本と天理本とでは、おおむね天理本の方が刷りの状態がよく、活字の欠損も少ないが、冊・丁によってはこれと反対の事例もあること、天理本の誤植を新出本が訂正した箇所がある一方で、新出本の誤植を天理本が訂正したと見られる箇所もあること、などの点から、刷りが前後する丁を適宜一冊に綴じ、それを適宜百冊の揃本として販売したのが新出本であろうとする。さらに表紙裏文書に寺町下御霊前町の太兵衛なる人物の名がしばしば見えることを踏まえ、同人が古活字玉屋謡本の刊者であった可能性を示唆し、光悦謡本の雑多な版に基づく海賊版として寛永年間に刊行されたかと結論づける。

同じく江戸初期の観世流謡本を対象に、これを国語学的立場から考察したのが、宮本淳子「観世黒雪と光悦流」（『学芸国語国文学』51。3月）である。観世黒雪の天正年間から元和年間にいたる自筆自章謡本六点を取り上げ、その書風が年代とともにどのように変化したかを異体仮名の使用傾向という指標により論じたもので、天正年間には多様な異体仮名を用いていたのが、光悦流の書風に変化した慶長十年代には仮名字体の種類数が著しく減少すること、元和年間になると再び異体仮名の種類が増加傾向を見せ、一方で光悦流に特徴的な字体であり、かつ黒雪も慶長期には頻繁に用いていた「濃」字母仮名の使用がほとんど見られなくなるなど、光悦流の書風からの乖離が顕著であることを指摘。国語学において従来言われていた、華麗な装飾料紙と多様な異体仮名との関係はこの場合、必ずしも当てはまらないとする。

一方、高橋葉子「『謡曲秘伝書』と常盤会謡本」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』30。3月）は、近代の観世流謡本に関する音楽学的な考察。大正三年に大喜多信秀（大西閑雪の孫）の名で出版された常盤会謡本、及び曲毎の謡い方に関する解説書『謡曲秘伝書』の実際の編者が大西閑雪であることを確認した上で、同謡本に多用されるウキ節や甲グリが、一時代古い謡の旋律を伝えるものと指摘。観世流岩井派の謡の特徴がどこにあったかを明らかにする。また、常磐会謡本の一部の詞章に明和改正謡本との関係が窺える、との指摘もあるが、これについては今後の課題としている。

入口敦志・江口文恵・田草川みずき・深澤希望・柳瀬千穂・山吉頌平・竹本幹夫の連名による「『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿（貞享三年五月～十二月分）」（『演劇研究』42。3月）は同日記の能楽関連記事を抄出した連載の続き。今号には貞享三年の後半期分を収め、奥舞台での恭姫（綱紀養女）拝見の御能の記事などが見られる。

大山範子「志水文庫の能楽資料について」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』13。6月）は、近世演劇の研究

者として高名な信多純一氏蒐集の蔵書で、後に神戸女子大学古典芸能研究センターに寄贈された「志水文庫」中の能楽資料を紹介したもの。同文庫には、伊藤正義編『版本番外謡曲集』の影印底本となった田安家旧蔵番外謡本をはじめとする117点の謡本、服部宗巴筆『音曲秘伝之哥』ほか17点の能楽伝書など、かなりの点数の能楽資料が含まれるが、その中から従来未紹介であった『新能楽』を取り上げ、翻刻と解題を載せる。同資料はロシアのプチャーチン来航に関わる一件を踏まえ、当時の世相を能番組に見立てて風刺したもので、安政五年頃の成立と考えられるという。

絵画資料に関連する論考が一本。青山訓子「近代日本画と能」（『国立能楽堂』426。2月）は、近代の日本画家前田青邨の作になる能画「石橋」「出を待つ」の制作をめぐるエピソードを紹介するとともに、その美術史的価値を述べたもの。

この年は『観世』が能舞台を年間の特集として取り上げたほか、能舞台・能楽堂に関する論考が多く見られた。中には【能楽史研究】の項で取り上げるべき内容のものもあるが、便宜上ここで取り上げる。

まずは、その『観世』所収の論考から。「観世流と能楽堂の歩み」と題された全十二回の連載のうち、前半の六回が二〇一九年分で、（一）（二）が小林保治、（三）が奥冨利幸、（四）が林和利、（五）（六）が澤木政輝の担当。小林稿は能楽堂の概説に始まり、各能楽堂の構造の違いを手際よくまとめる。鏡板の松の絵に見られる多種多様なバリエーションを紹介するほか、椅子席・座布団席の両様が併存する能楽堂の見所についての提言もあり、岡崎城二の丸能楽堂のモデルを参考に、階段状の座席が作り出す新たな劇場空間の可能性を示唆する。奥冨稿は、対置式→囲繞式→入れ子式と展開した能楽堂の変遷過程を、多くの具体例にもとづいて概観。飯田町・新小川町に建設された三つの観世会能舞台（観世会館）の建設の経緯、構造上の特徴等を述べる。林稿は明治期以降の名古屋の能舞台について。明治・大正・昭和と長年にわたって用いられた呉服町舞台（後移転して布池能楽堂と改称）、那古野神社能舞台、戦後の復興期に完成を見た熱田神宮能楽殿、平成九年に名古屋市が建設した名古屋能楽堂等、名古屋における能舞台の消長を述べる。澤木稿は京都における観世流の能楽堂の変遷を分かりやすくまとめる。大正七年創建の丸太町観世能楽堂、明治四十一年創建の大江能楽堂が、ともに空襲への対策として建物疎開の対象となるも、大江能楽堂はギリギリのところで解体を免れたこと、建物疎開で能楽堂を失った片山博通が苦難の末に京都観世会館の建設を実現させたことなど、近代京都の能楽堂の歩みを興味深いエピソードとともに綴る。河村能舞台・嘉祥閣をはじめとする昭和三十年代以降に創建された比較的新しい舞台についても、現在の利用状況を含め丁寧に紹介されており参考になる。なお、翌年の連載では大阪・神戸・九州の能楽堂が取り上げられた。

近代の能舞台を取り上げたものには、次の四本があった。三浦裕子「靖国神社と能楽」（『武蔵野大学能楽資料センター

紀要』30。3月）は、明治十年に招魂社（後の靖国神社）境内に新設された能舞台と、そこで上演された能の演者・演目についての論。『靖国神社誌』『梅若実日記』をもとに、明治十年から三十五年にいたる二十六年間の演能状況を概観し、梅若実が演能の実質的な取りまとめ役であったこと、演目には場所柄から負修羅、地獄・親子離別・皇族に関する曲目が避けられる傾向があったことなどを指摘する。王冬蘭「日本統治下台湾における能舞台」（『芸能史研究』227。10月）は、日本の統治下に置かれていた時期の台湾における能の受容史をまとめた論で、このテーマに関する最初の体系的な研究。明治末期に台湾に渡って当地の能の普及に尽力した喜多流の能役者八戸岩三郎（元弘前藩御抱え役者）の弟子、大村定の活動を辿り、彼が台北の自邸に設けた能舞台の様子を、文献資料だけでなく、関係者からの聞き取りや現地のフィールド調査をも交えて詳細に辿る。能舞台に対置し、客席として用いられた大村定邸の母屋は、今も「大村武」の店名を掲げる串焼き店として現存する由で、知られざる歴史の一面を掘り起こした興味深い論考。

辻慎一郎「能楽師を運営主体とする近代能楽専用施設における観覧領域の形成過程」（『建築史学』73。9月）は、明治末期～昭和初期の能楽堂における客席がどのように区画されていたかという問題に焦点を当て、膨大な資料を博捜してその実態、変遷を明らかにした労作。能楽堂全体の構造について論じた研究はこれまでにもあったが、客席に特化した先行研究は少なく、新たな視点を提供する。奥冨利幸「昭和期の観世流宗家の能楽堂の変遷について」（『日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）』。9月）も同じく明治末期～昭和初期の能楽堂を取り上げた論考。内容的には雑誌『観世』に掲載された「観世流と能楽堂の歩み」と重なるところが多く、飯田町・新小川町に建てられた観世会能楽堂の劇場構造の変遷を辿り、新小川町舞台が後に湊川神社へ移築された経緯にも簡単に言及する。

現存能舞台の実測調査に基づく論考もあった。大岩智之・佐藤圭一「絵図・古写真分析による阿部神社能舞台の建築年代推定」（『日本建築学会中国支部研究報告集』42。3月）は、広島県福山市に現存する四つの能舞台のうち、阿部神社（備後護国神社）の境内に立つ能舞台の遺構を対象としたもので、古絵図・古写真に基づき、その創建年代が維新前後から明治十年代に絞られること、橋掛りと鏡の間は戦後に撤去されたか崩壊して、現状の姿となったことを指摘。その続考である「阿部神社能舞台の復元図面（意匠図）作製」（『日本建築学会中国支部研究報告集』42。3月）、「阿部神社能舞台の復元図面（構造図）作製」（『日本建築学会学術講演梗概集（北陸）』。9月）では、実測調査と古写真等によって同能舞台の寸法分析を行い、それをもとに意匠図と構造図を作製する。

なお、この年には能楽研究所のサイトに「伊達家旧蔵能楽資料デジタルアーカイブ」が新たに立ち上げられ、能楽研究所が所蔵する全ての伊達家旧蔵能楽資料のデジタル画像が解題

付で公開された。解題は小室有利子・深澤希望の執筆。他に総説として竹本幹夫「伊達家旧蔵本について」がアップされており、伊達家における能楽資料の形成過程、同家旧蔵書における能研所蔵本の位置づけが詳細に述べられ、伊達家における能楽資料の全体像の理解に大いに役立つ内容となっている。（宮本）

【能楽論研究】

能楽論研究については、世阿弥伝書に関わる数本を紹介する。重田みち「世阿弥の「幽玄」「夢幻能」「歌舞能」を問い直す」（『古典文学の常識を疑うⅡ』勉誠出版。9月）は自身の論文をふまえ、「幽玄」「夢幻能」などの概念に関して再考を促すもの。まず「幽玄」には、縹渺とした景気、奥深さや繊細さを表す系列と、本来それらとは対蹠的な「花」（花やかさ）とも一体化した、柔和ではんなりとした美を指す系列とがあり、足利義持政権時代に変質した世阿弥の「幽玄」は後者を意識したもので、「優美」と訳すのは不適切であるとする。また、神能の高砂や老松、幽霊能の通盛・檜垣・船橋などの神や霊が、夢幻ではなく現実の人の前に姿を見せる以上、夢幻能という呼称は実質に反し、一場物か二場物かという区別と、登場人物が現われるのが現実世界か夢の中かという区別で分類する方が、問題が少ないと提言する。さらに、世阿弥の歌舞能の原点は、幽玄の能よりも、祝言の神能にあると強調する。

同じく重田みち「〈藝道〉としての能楽―茶の湯・立て花などの室町文化との比較研究の効用」（『銕仙』694。7月）は、『花鏡』など世阿弥能楽論にみえる「藝道」の語を、岡崎義惠が能のみならず様々な文化ジャンルに応用した経緯を紹介し、その学術タームとしての有効性を確認した上で、能楽論と茶や花の伝書とに共通する用語として、「一座建立」と脇能の「脇」を取り上げる。前者については『風姿花伝』奥義篇だけでなく茶の湯伝書の『山上宗二記』にもみえること、後者については連歌の脇句だけでなく、『喫茶往来』に一番茶の次の茶を「初番の脇」と読んだ例や、『立花口伝大事』（『花道全集 二』所収）に「本尊の花の脇」「脇の花」という用例がある例を示し、藝道という視点から能を考える意義を提言する。

また、上野太祐「世阿弥の「申楽」由来説再検討―その思想的眼目をめぐって」（『書物・出版と社会変容』22。2月）は、『風姿花伝』神儀篇にみえる、神楽の神の旁の「申」から申楽と名付けたという「申楽」由来説についての検討。《老松》《高砂》にみえる「神神楽」を手がかりにすると、世阿弥は神楽に対して、隠れた存在者のもつ超越的な力を引き出すという特質を見ていたとし、世阿弥が「申楽」由来説を主張した眼目は、見手を「面白」と感応させる「花」の芸は、アマテラスの力を引き出すことで成就するという構造を説くことにあり、単に「猿」字への嫌悪と「申楽」の権威向上ではないと論じる。

鈴木さやか「世阿弥能楽論および謡曲における「天女」「乙女」についての一考察」（『国際関係・比較文化研究』172。3月）は、天女の舞の本質が受動性にあり、また能において乙女とは天女の性質を色濃く映すもので、その天女とは「奉仕をなすもの」「したがふもの」として存在しているとする。ただ、『二曲三体人形図』に「舞に舞はれて」「花鳥之春風に飛随するがごとく」とある記事を受動性と捉えるにしても、その受動性は神仏に奉仕するという天女の性格とは別次元の話である。謡曲の引用が『謡曲二百五十番集』に基づいており、《大典》のような近代新作能における「少女」と、室町期の作品の「乙女」を同列に扱っている点なども問題がある。（高橋）

【能楽史研究】

この年は能面に関する研究が複数出ているので、能面研究から紹介する。宮本圭造「寛正二年在銘の「怪士」面が物語ること」（『銕仙』695。9月）は、以前、西野春雄によって『能楽研究』22に紹介された、ドイツ・ハンブルクのローテンバウム博物館（旧ハンブルク民族博物館）所蔵の能面のうち、怪士に近い造形の面について、赤外線カメラを用いた調査により、寛正二年（一四六一）に寄進されたことを示す墨書銘が確認できたことを、その造形上の特徴と共に報告するもの。これまで能面の歴史において空白期となっていた、永享年間から文明年間に至る約四十年の間を埋める作例であり、素朴な特色を持つ世阿弥時代の古面に比べて、美的に洗練された彫刻表現を体現している点においても、能面の歴史上、貴重な作例として位置付ける。

能面に関しては、『能楽研究』43（3月）に、アダム・ゾーリンジャー「面打大光坊と「井関明息斎」」、宮本圭造「面打井関備中守追考」、同「面打角坊考」の三本も掲載されている。近江の面打井関については、『能楽研究』40の宮本圭造「面打井関考」により研究が大きく進展しているが、それをさらに進めたのが最初の二論文である。宮本圭造「面打井関備中守追考」は、美術工藝丹中の「能面の美」vol.3（二〇一五年）掲載の、慶長七年二月の井関十兵衛尉の面裏墨書がある尉面を通して、複数の井関備中守の関係性を再考する。この井関十兵衛尉は、福岡市博物館蔵・大飛出等に銘文を残す永禄頃に活動した井関備中守とも、黒川能上座蔵・橋姫等に慶長期の銘文を残す井関備中守とも異なる人物で、この井関十兵衛尉こそ井関河内の父、備中守家久にあたると考証する。そして、この井関河内の父とは異なる、慶長期の銘で知られる井関備中守（十兵衛）については、ボストン美術館蔵・賢徳の調査などから「△」の細工印を使っていたことを指摘、同様の刻銘を持つ能面を含め、八例の面の作例を示す。さらに、萩藩の家中由緒書『譜録』（山口県立文書館蔵）にみえる鞍打の井関十兵衛が、この慶長期活躍の井関備中守と同一人物とみられると推定し、井関十兵衛を初代として記載する『譜録』の関連記事を紹介する。

アダム・ゾーリンジャー論文は、スティーヴェン・マーヴィン氏蔵・大癒見の剥落した彩色下に、観世文庫の『諸家花押控』に移し取られたものと同様の天正七年（一五七九）六月廿八日の井関明息斎作の銘文や、明和七年（一七七〇）正月の出目元休満真の修理銘がみえ、面裏に「井⊠」の刻銘があることなどを報告し、同様の刻銘を持つ能面や、井関明息斎（もと大光坊幸賢）の他の作例とも比較しながら造形上の特色を指摘する。同様の「井⊠」の刻銘を持つ多賀大社蔵・茗荷悪尉と福井県立歴史博物館蔵・姥の面についても、大光坊が還俗して井関明息斎と名乗った後の作と位置付け、同人による面の刻銘の様式の変化などにも言及する。

宮本圭造「面打角坊考」は、『能楽研究』38掲載の「『仮面譜』の成立」において「天下一若狭守」の焼印がある面を角坊作とする通説を退けたことを受けて、改めて角坊についてその作例や事績を考証する。角坊は文禄二年（一五九三）に観世・金春の名物面の写しを短期間で作り、秀吉から天下一号を許されたことが知られるが、同論文では、『前田家所蔵文書』「古蹟文徴」所収の駒井〔重勝〕宛〔木下半介〕書状や関白殿宛秀吉朱印状などに基づき、秀次が関わる形で肥前名護屋の秀吉のもとに名物面が集められていた状況などを紹介し、天下一号については秀吉の朱印状に基づき、形式的には天皇が勅許する形を採っていた可能性も想定する。また、角坊真作の現存面として、面裏に「角坊」の墨書を持つ須賀神社蔵・女面、徳川美術館蔵・小飛出、金春安明氏蔵・山姥の三面を指摘、その特徴について述べる。そして角坊は、法名を光盛法印という日野法界寺の住僧であるとして、角坊を光盛の子の光増に比定する説については否定する。また、天文年間頃の生まれで慶長末年頃まで存命だったと推測し、文禄・慶長期を代表する面打として再評価する。

続いて、能楽史に関する研究を、古い時代から順に述べることにする。宮本圭造「鎌倉・南北朝期のおん祭と猿楽」（『春日若宮おん祭』。12月）は、元亨二年（一三二二）の宇治猿楽の大和における活動に対する大和猿楽の抗議と武力行使について記す、興福寺大乗院文書（内閣文庫蔵）の『元亨二年記』の原本により、鎌倉期、春日若宮おん祭と興福寺薪猿楽に宇治猿楽が参勤していたことを確認する。そして、宇治猿楽は平安末期から鎌倉期のおん祭にもともと参勤しており、鎌倉期に大和猿楽がおん祭に参入する際に、大和猿楽のみが出演していた興福寺薪猿楽に宇治猿楽も参加するようになったという仮説を提示する。また、宇治猿楽は後におん祭・薪猿楽から排除されるが、大乗院鎮守天満神社の神事能参勤を認められ、その無償参勤を条件に大和国内の郷村の祭礼への参入を容認されるようになったと想定する。

宮本圭造「切支丹能は存在したか」（『古典文学の常識を疑う2』。9月）は、イエズス会宣教師の日本報告書にみえる宗教劇の記事を検討すると、能面や楽器に関する記述も一切なく、能である確実な証拠は見出せず、かつて林屋辰三郎がこれを能形式の演劇と断定し「切支丹能」と名付けたことに

は無理があるとする。そして、キリシタンが演じた宗教劇は、日本語の韻文の歌が独唱と合唱によって歌われるという形式であったと推測する。また、復活祭の折に聖体行列の中で演じられた宗教劇の様々な仕掛けは、風流の作り物や山車カラクリの影響を受けたものであったと推測する。

この年は、資料研究で取り扱った論文を除くと、近世能楽史の研究は少なかった。趙菁「前田斉泰の『申楽免廃論』について―能楽に養生的価値を見出す理由」(『金沢大学国語国文』44。3月)は、十三代加賀藩主前田斉泰が脚気による闘病生活を経て弘化二年(一八四五)に著した『申楽免廃論』について、藩の困窮の中で演能に対する批判があった中、藩主の健康が藩にとっても良いとアピールする、藩主ならではの養生論としての側面を強調する。また、飯塚恵理人「《資料紹介》熱田猿楽大岡宮福太夫の勧進活動」(『東海能楽研究会年報』第23号。3月)は、直接の能楽資料ではないが、熱田神宮の正月の踏歌祭で翁大夫を勤める家柄の大岡宮福太夫に関連する資料紹介。津島神社宮司の分家である堀田家の蔵書・堀田文庫(蓬左文庫寄託)の中から、十八世紀後半に「勧進熱田大岡宮福太夫」の依頼で、堀田知之(和歌と俳諧に親しんだ津島の酒造・大黒屋当主で、俳号は木吾)やその関係者が池辺松を題に詠んだ歌を紹介する。

近代以降の能楽史については、以下三本がある。伊藤真紀「「謡曲放談会」と近代能楽研究の胎動」(『文芸研究(明治大学文学部紀要)』137。2月)は、能楽専門誌『能楽』に明治三十六年六月から同三十八年十二月まで二十三回にわたり掲載された「謡曲放談会」の記録について、これを近代における能楽研究の胎動と位置づけ、経緯や議論の内容を検討するもの。語句の評釈だけでなく戯曲として能を解釈しようとしていたこと、「趣味」「余情」「趣向」といった観点が作品評価のひとつの指標となっていること、叙情と叙事という西欧流の文芸観の影響を受けた評がみえること、謡曲に進化・発展をみる考え方が伺えること、謡曲放談会の論議が坪内逍遙や久米邦武を触発した面があることなどにふれている。

細谷由希「近代における東京音楽学校と能楽―能楽科目設置に対する能楽界の反応と意図を中心に」(『音楽芸術マネジメント』11。12月)は、文部省直轄の東京音楽学校に一九一二年に「能楽囃子生徒養成規定」が制定され、一九三一年にアマチュア対象の選科の学科目に能楽が加えられ、一九三六年にプロ育成の本科と同格の扱いで能楽を含む邦楽科が設置されるまでの経緯と教習内容などを整理して示し、背景となった社会状況や、能楽界の反応などにも言及する。

梅若実・金子健「能役者 梅若実・初世から四世まで―襲名を記念して」(『武蔵野大学能楽資料センター紀要』30。3月)は、二〇一八年八月三日に行われた武蔵野大学能楽資料センターの能楽研究講座における、四世梅若実(現・桜雪)へのインタビュー記録(聞き手・金子健)。二〇一八年二月に四世梅若実を襲名した記念として、初世梅若実(一八二八～一九〇九)に関する言い伝えから始まり、二世(一八七八～

一九五九）・三世（一九〇七～七九）の思い出や芸風など、さらに四世梅若実自身の能に対する考え方や稽古の思い出も語られており、貴重な記録となっている。

その他、海外での能楽に関しては、ブラジルの日系移民による能楽愛好の会「伯謡会」の活動について考察した、関屋弥生「伝統芸能と共同体意識―日系ブラジル移民が伝えた能楽の活動を中心に」（『演劇学論叢』18。3月）がある。伯謡会は、ブラジルに渡った能楽研究者、鈴木暢幸が発案し、元陸軍中佐の吉川順治が中心となって活動した会で、一九三九年十月以来、戦前に六回開催され、素謡・独吟・仕舞などが披露されたという。その活動実態を紹介すると共に、日系移民の十四歳以下の子弟に対する日本語教育が新移民法によって禁止された時代に、日系社会の共同体意識を保持する一環として能楽に目が向けられたことが伯謡会の活動の背景にあったと論じている。（高橋）

【作品研究】

本年に発表された作品研究を中司と深澤で分担執筆する。『鍖仙』や『中世文学』『説話文学研究』等は中司が、『藝能史研究』『国立能楽堂』『おもて』等は深澤がまとめて担当、『観世』は両者で担当している。

本年は世阿弥の能を扱う論考が多く発表されている。大谷節子「世阿弥の「世界劇場」」（『演劇学論集』69。12月）は、二〇一九年六月におこなわれた日本演劇学会全国大会での講演に加筆訂正をしたもの。『貞和五年春日社臨時祭次第』の「斑足太子の猿楽」等の記述から、世阿弥以前は「時間軸に沿って題材を忠実に劇化」した猿楽が演じられていたことを指摘。起伏に富む筋中心の多場面の猿楽から「様式化した一場構成」への変化に注目。この変化は能に舞が導入されたことで進み、「能は抽象性を増し、後場には再び出物として登場するシテの物語として再構成」されたという様式成立の過程を示す。〈高砂〉の考察を通して、世阿弥は「本意の表象」をねらって能を作ったこと、「曲趣（ジャンル）意識の確立」をはかる際に和歌の部立てを意識、部立てを具象化する和歌の題「本意」を利用したことを論じる。

三宅晶子「能　ワキが似合う西行」（『中世文学』64。6月）も中世文学会春季大会シンポジウム「なぜ西行なのか」の講演を論文化した論考。『申楽談儀』の「西行の能」に関して、旧稿（「作品研究〈西行桜〉」『観世』61-5。5月）をふまえつつ、金春禅竹の『歌舞髄脳記』草稿本〈西行桜〉から抹消された歌の内容によって〈西行桜〉は禅竹作ではないこと（「西行の能」は〈西行桜〉であること）、『申楽談儀』で「西行の能」のみ「昔のかゝり」と言い直している点に注目し、〈西行桜〉の「完璧なシテ中心主義ではない作風」に「昔のかゝり」が認められることを新たにあげる。西行は能以前から多くの逸話を持つ有名人であること、観察者という役柄で様々な事柄に遭遇し、歌を詠むといった姿が夢幻能形式のワキに似ていること、つまり「西行の物語にシテが入り込んで

くる形でワキ役が定位置化している」ことが、「霊的存在が登場しやすいワキ」の西行像を創ったと考察する。

〈西行桜〉の演出では表きよし「能〈西行桜〉の小書について」（『銕仙』691。4月）がある。小書「比多杖之伝」について、「杖之舞」と「彩色之伝」の特徴を合わせたような形であることを指摘、「ひたすら杖を持って演じる」という意味であって、舞だけでなく登場から退場まで杖を持つのが本来の演出であった可能性をあげる。

近藤弘子「世阿弥の能作における表現の変化―〈求塚〉〈綾鼓〉〈恋重荷〉〈砧〉に見られる地獄描写を中心に―」（『横浜国大国語研究』37。3月）は、〈求塚〉の地獄描写が『往生要集』や「地獄絵」等に見える、恐怖を与える具体的、直接的な描写をそのまま借りたものであり、シテの演技も具体的な所作を伴ったものになっていると述べる。これに対し〈恋重荷〉では、先行する〈綾鼓〉の冥途の鬼が与える身体的苦痛による地獄の描写から脱却するために、地獄の具体的動作を減らし、和歌を引くことでシテの内面に踏み込み心情を表現する工夫がなされていると考察。さらに〈砧〉では地獄の描写は少なくなり、シテの心的苦痛の描写で地獄を表現するようになったと論じる。〈求塚〉から〈砧〉に至る世阿弥の能作において、物まねの表現から脱しようとする手法に注目している点が興味深い。

同じ『横浜国大国語研究』には、三宅晶子「「三五夜中新月色　二千里外故人心」をめぐって―白楽天と紫式部と世阿弥と禅竹―」も掲載される。『和漢朗詠集』や『源氏物語』須磨巻など様々な文学作品における、表題句の引用法や解釈の検討を通して、〈融〉では原詩や『源氏物語』などとは異なる特殊な使い方がされていること、一方で『平家物語』「青山之沙汰」は『源氏物語』の影響化にはなく、〈融〉の引用方法や後場の時間設定と共通点があること、禅竹作〈雨月・小督・姨捨〉での引用法は『和漢朗詠集』と共通することなどを指摘する。

〈姨捨〉世阿弥作者説を論じるものに、尾本頼彦「《姨捨》作者考再検―世阿弥の老女能の能作史をめぐって」（『演劇学論叢』18。3月）がある。「月・孤独・懐旧・却来」をテーマとする〈姨捨〉は、「無文・無心の冷えた幽玄美」を目指した世阿弥が、応永三十年代前半に記した芸論と対応する作品であることを考察する。

三苫佳子「世阿弥の男物狂能の場面構成」（『名古屋芸能文化』29。12月）は、〈土車〉〈丹後物狂〉〈高野物狂〉〈木賊〉〈芦刈〉の構成を示したうえで、「放下」の構成との一致を述べる。三苫には作者を世阿弥と想定した「能『三井寺』の狂気と悟り」（『あいち国文』13。9月）もある。

中野顕正「能《野宮》における聖俗の転換」（『中世文学』64。6月）は、御息所が妄執に囚われたまま消え去るという、従来の終曲部の読みとは異なる新たな解釈を提示し、〈野宮〉の構想を論じる。曲の冒頭では野宮・伊勢は聖域であるが、シテの出現とともに『源氏物語』に由来する妄執の象徴となり、

終曲部では再び聖域のイメージに回帰していると指摘。終曲部は、御息所が自らの妄執ゆえの行為と認識していた野宮回帰を「迷いの姿を受け容れ難く思った神が自分を解脱へと導いていた、その結果だったのだ」と認識し直す場面であると読み解く。鳥居の作リ物は「〈妄執〉から〈聖なるもの〉」という御息所の意識の転換の象徴であること、鳥居と同様に車のモチーフについても「〈妄執〉から〈聖なるもの〉」に転換していることをあげ、車のイメージを〈葵上〉の「妄執」から反転させた点に、本曲の構想のねらいを見る。また車が「聖なる存在」に転換する構想に、遊女の象徴であった舟が聖なる白象に転じる〈江口〉の影響を想定する。一方で〈江口〉とは異なり、本曲の救済には不確かさが残り「《江口》の手法を踏まえて外す構想」になっていること、〈定家〉のように一度示された救済がやがて失われ「再び救済の不確かさが一曲を覆ってゆく」構想があることも述べる。

本年は学会のシンポジウムや講演を論文にしたものが多く、前掲の大谷稿と『中世文学』の三宅稿に加え、伊海孝充による二論も発表された。二〇一八年六月の説話文学会大会シンポジウム「判官物研究の展望」の講演をまとめた「義経の悲運を〈語る〉劇―判官物の能の手法」（『説話文学研究』54。9月）は、幸若舞曲の「腰越」「含状」には源平合戦の行軍の過酷さを強調し、それを「流浪」として悲劇の根源に位置付けるなどの特色があると述べたうえで、源平合戦後の源義経の転落から自害までの生涯（「東国落譚」）を描く能では、全く腰越状を扱っていないことを明らかにし、その理由を「東国落譚」の能の各曲は「腰越状に内包される義経の悲嘆を〈語る〉劇」であったためと指摘する。能では腰越状の代わりに、クセ・問答・語リで義経や郎等たちが義経の不遇を「語る」場面があり、その内容に腰越状の情趣が反映されているとする。この「語る」場面では、腰越状と同様に源平合戦が苦難の連続であったことが強調されること、各曲が難解な故事成句を引用しそれぞれに義経の悲運を表現していることを独自性としてあげる。

もう一本は、第二十六回楽劇学会大会シンポジウム「楽劇と平家物語」での報告を再構成した「能と平家物語の関係をめぐる諸相―詞・音楽・劇―」（『楽劇学』26。5月）。『三道』の「平家の物語のまゝ」の記事に関わる先行研究などを示したうえで、能の詞章が能成立以降に書写された『平家物語』の本文に影響を与えた可能性を提起する。さらに、音楽として『申楽談儀』の「平家節」と〈景清〉の「松門」の謡を取り上げる。戦前に金剛流において「松門」の謡を平家節とする言説が流布していたこと、室町時代の『節章句秘伝之抄』などや江戸時代の謡伝書の用例から「呂の調子」が「平家」の音曲と類似するという説が継承されていること、しかし謡伝書では具体的な曲名や謡はあげられておらず、「松門」の謡と関係づけることもなされていないことを指摘。よって、「「松門」の謡＝呂の調子＝平家節」の説明は近代に入ってからのものであり、早くても江戸時代末期から次第に流布した

と想定。〈景清〉がシテの「重層的な人物像」によって次第と重い曲へ扱いが変わっていく過程で、「松門」の謡の特殊性が強調されたことをあげ、その際に「平家節」という言葉が特殊性を「〈形象化〉するための記号」として使われたと推定する。

ここからは『鍄仙』「研究十二月往来」の論考を紹介する。天野文雄「『張良』の「沓」の演出について」（688。1月）は、『豊高日記』『岡家本江戸初期能型付』等から、古くは沓を履いて登場したシテ黄石公が自身で沓を投げていたこと、やがて後見が脱がせて投げるようになり、喜多流以外は沓を履かずに登場するようになったことを指摘。絵画資料から後見の役の定着を天明初年頃と考える。

小田幸子「切り取られた風景―〈熊野〉の車―」（690。3月）は、〈熊野〉の作リ物の車の効果として、宗盛の館から清水寺への場所の変化を鮮やかに表現すること、作リ物の枠でシテを取り囲むことによって観客の視線を集め、クローズアップすることをあげる。特に後者について、都の春の明るい風景に目を留めていたシテが次第に不安感を募らせる場面は、閉ざされた空間にシテが置かれているからこそ生まれる効果であると述べる。

竹本幹夫「〈草子洗小町〉小考」（692。5月）は、作者は登場人物が時代的に合わない事実を知っていながら、『古今和歌集』撰者紀貫之という権威を判者にし、天皇の前で小野小町と大伴黒主が「和歌の道を賭けて対決する」という趣向を目指し作ったと考察。「現実無視の奇想天外な趣向」の中で人間を描いた「新しい演劇」であった可能性を示す。

高桑いづみ「井筒―物着と三段ノ一声―」（696。10月）は、現行〈井筒〉の一声において、曼越を打たない不越を正式とする理由について、「物着」が〈井筒〉の本来の演出であり正式な本三番目物とは異なるからだという説に疑問を呈する。室町期の装束付等から「物着」は本来の演出ではないことを指摘しつつ、室町期の様々な囃子伝書等に見える「三段ノ一声」に注目し検討する。乗らずに吹き出すことや越ノ手を打たないといった「三段ノ一声」の実態と変容を明らかにし、「三段ノ一声」が退転し実態が不明になった後に、「物着」が考案されたことを論じる。

松岡心平「能「小督」と『源氏物語』」（698。12月）は、作者を金春禅竹としたうえで、『源氏物語』の歌や文脈を要所で引用することで作品の深みが増している例を具体的に指摘する。特に能独自の場面である酒宴での小督と仲国の合奏に、「帚木」雨夜の品定めでの佐馬頭が語る話が重ねられている点を重視する。

他に『鍄仙』には伊海孝充「溝越天狗の役割―《車僧》の間狂言小考―」（697。11月）がある。近年は積極的に間狂言の内容を検討することで、作品研究や夢幻能の本質に迫る研究がおこなわれている。よって今回は、作品研究で間狂言に関わる論考を取り上げることにしたい。伊海稿は、アイ溝越天狗の語る台詞の比較を通して、能では説明されないワキ車僧の

人物背景や太郎坊の造形が狂言台本ごとに異なることを指摘。京都大学附属図書館蔵「車僧草子」の記述と貞享松井本が近いことから、〈車僧〉成立当初またはそれに近い時期の車僧の人物造形を「わずかな心の隙をつかれた貴僧」と読み解く。

西村聡「アイの語りの分際（上）―前シテの語りと比較して―」（『金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇』11。3月）は、語リアイ（貞享松井本）と能本文の詳細な比較検討を行い、夢幻能の本質をとらえなおす論。「アイの物語がシテの物語と異なること、あるいはアイがシテの物語を再説しながら両者の水準が異なること」を〈舟橋・鵺・鵜飼・野守・井筒・檜垣・遊行柳〉を例に具体的に指摘する。「アイがアイの語りの分際を守り、シテの物語の水準に及ばない理由」は、「通俗的説明の流布」を不本意に思うシテが、ワキに物語を後世に語り継いでもらうことを期待するという複式夢幻能の構造にあると論じる。

飯塚恵理人「間狂言及びワキの狂言応答から見る《当麻》の骨格」（『紫明』44。3月）は、複数の間狂言台本を比較した「記事別異同対照表」を掲載する。

『観世』では特集曲を扱う様々な論考が掲載されている。はじめに作品に関連する事柄について専門の研究者が執筆し、次号に能楽研究の立場からの論考が続く場合が多く、両者を合わせると新たな視点で考えさせられることがある。2月号の坂井孝一「史実・文学から能『小袖曽我』へ」は、真名本『曽我物語』の特色は兄弟の父と母の形象が重ね合わせられて母一人に役割を収斂させる叙述方法にあり、母子の愛情を主題にすることで読者の心を掴む効果が生まれることを指摘、史実から文学への展開を論じる。能の「曽我物」の特徴を①現在能がほとんどであること、②敵討ちそのものではなく、兄弟の苦難・恩愛の情などを主題にすること、③仮名本よりも真名本に近いこと、④真名本が基盤とする東国武士の荒々しい世界を素材にしていないことをあげる。能の作者は、母子の愛情を描くものとして巻六の母が勘当を許す場面が最適と考えたとし、「曽我物」の中でも〈小袖曽我〉が早い時期に成立した可能性を提起する。真名本巻六で兄弟が小袖を所望するのは、巻十の敵討ち後に母が小袖を抱え慟哭する場面の伏線となっており、『曽我物語』が普及し始めた室町期には勘当を許す場面と小袖所望の場面が一続きと認識されていた可能性があり、曲名だけで小袖を抱きしめる母の悲痛を想像させる効果があることを指摘。曲名に小袖を冠しながら詞章・舞台にも小袖の出ない理由とする。

能の研究の立場から、右の小袖の問題を論じたのが、3月号の佐藤和道「〈小袖曽我〉考―曽我兄弟の舞と母親の視点―」である。能が真名本に近い特徴を持つという指摘は坂井稿と同様であるが、佐藤稿は十郎の舞に注目する点が興味深い。〈盛久〉と〈小袖曽我〉の展開を比較し、両曲が小段構成まで含めて似ているとする。〈小袖曽我〉の後半は〈盛久〉の形式を模倣して作られたとし、後半に本来あるはずであった「小袖の授受」が省かれたのは、「男舞の形式に従って新たに舞の場

面が付加されたため」と考える。また享受の問題として、近代の教科書教材に〈小袖曽我〉が掲載されたことを紹介し、特に女子向けの教科書で採用された理由を「私心を捨てて兄弟を狩場へ送り出す母親の「賢母」としての側面に着目したため」と述べる。

4月号は五味文彦「〈大原御幸〉考」。覚一本『平家物語』灌頂巻を丁寧に読み解き、『平家物語』は「六道之沙汰」での女院の語りに中心があると考察。それに対して能は灌頂巻でも「大原御幸」に焦点を当て、法皇が大原へ向かう場面と女院が山路へ入る場面、法皇が庵へ入る場面と女院が山から下る場面を並行させて描き、二人が庵で話をするという「劇的な構成」になっていること、金春禅竹『五音十体』の〈大原御幸〉に添えられた小侍従の歌が主題を暗示していること、女院が山路を上り樒を摘み、山から降りる場面が重要であることを指摘する。また室町中期、多くの貴人が戦乱や一揆から逃れ、閑寂な洛外の地に庵を構えるようになった状況が、本曲の成立の背景にあるとする。

5月号の井上愛「青葉隠れの遅桜―〈大原御幸〉小考―」は、元章の作リ物図等から見える演出の工夫や、法皇と女院の関係を考察した論。女院が法皇との再会によって「憂き名」が漏れる懸念をしていること、法皇を出迎える再会場面は『平家物語』の法皇の到着場面の叙景を用いていることを指摘。大原の情景描写に、「憂き名」が立つことを思い悩みつつも法皇の行幸を待つ女院の「心のあやを内包させている」と読み解く。（中司）

7月号の中村修也「能『賀茂』誕生の背景」は、前シテの里女が語る賀茂社の謂れに注目し、カモ氏の祀る神々の誕生説話に「秦氏の女子」が登場する理由を検討する。前シテの語りに最も類似した伝承を持つ「秦氏本系帳」を紹介し、「鴨の氏人は秦氏の聟なり。秦氏、愛聟の為めに鴨祭を以て之を譲与す」と見えることから、カモ氏と秦氏の婚姻関係を想定し、両氏が賀茂祭へ共同奉仕するのを契機に、秦氏がカモ氏の出自伝承を取り込んだものと考察する。さらに、能〈賀茂〉の作者金春禅竹が、秦河勝を始祖と捉えていることにも触れ、「秦氏本系帳」に基づく制作背景には、自身の先祖の謂れを伝える目的があったとする。

9月号の落合博志「羽衣について―構想と詞章の問題―」は、従来指摘されていなかった依拠・関連資料を示して、詞章を再検し諸注を更新する論。〈羽衣〉のシテに投影される「霓裳羽衣曲を舞った月の妓女〈仙女〉」のイメージは、『十訓抄』第十などに見える玄宗の霓裳羽衣曲由来譚〈八月十五夜、玄宗が月に赴き、白衣を着た十二人の妓女の舞を見て、それを世に広めた〉にあると指摘する。白衣の妓女が舞うことが重要で、従来の注が指摘する、青衣天子十五人と一日ずつ入れ替わり月の満ち欠けを起こす「十五人の白衣天子」は舞わないため相応しくないとし、同様の理由で、〈融〉の「月宮殿の白衣の袖」、〈鶴亀〉の「月宮殿の白衣の袂」の典拠もあわせて更新する。また、〈羽衣〉曲舞の［サシ］冒頭「然るに月

宮殿の有様、玉斧の修理とこしなへにして」について、『謡抄』以下の旧注は引くが、近代以降引用のなくなった典拠、唐・段成式『酉陽雑俎』巻一、天咫の記事「月は七宝で出来ており、八万三千の家があって、常に斤（斧）や鑿で月を美しく整えている」に注目する。この故事から「玉斧修月」の成句が生まれ、日本の五山詩文へと流れたこと、〈羽衣〉の一節もこの成句の受容を背景とすることを新たに提示する。

11・12月号は〈景清〉の特集。兵藤裕己「能〈景清〉の背景―琵琶法師、その他―」は、寛正七年を上演記録の初出とする能〈景清〉において景清を「日向勾当」とし、その四年後の文明二年の『臥雲日軒録』に、景清を『平家物語』の作者と伝える、ある座頭（琵琶法師）の談話が見えることに注目。幸若舞や古浄瑠璃の『景清』で語られる類の景清伝承（頼朝を三十七度も狙う暗殺者で、捕縛後日向国宮崎に所領を与えられ、頼朝の姿を二度と見ないよう自ら両目を抉る）が当時流布していたと推察する。また、そうした景清伝承の担い手として、景清を祀る生目八幡社（宮崎市）や羽黒山などにいた「景清を祖とあおぐ盲僧・琵琶法師の存在」を指摘する。高桑いづみ「〈景清〉の演出―見どころ、聞きどころ―」は、タイトル通り鑑賞のポイントを解説する。松門の謡については「ツヨ吟とヨワ吟が複雑に入りくんでねじれたような、謡というより腹の奥底にわだかまる反骨精神、鬱屈した思いがそのまま声になったような独特の強い節廻しである」等、囃子・謡に通暁した筆者ならではの視点で詳述されている。

前掲の日本演劇学会・中世文学会・説話文学会と同じく、藝能史研究會においても「芸能史における「道成寺」」という分野横断的なテーマで大会が催された。『藝能史研究』224（1月）は大会報告に基づく論文が収録され、能楽研究の立場からの報告に、小田幸子「能『道成寺』の成立―舞台化の方法―」がある。〈三井寺〉〈舎利〉との比較を通じて〈鐘巻〉の構想を明らかにする論で、〈三井寺〉の名月と鐘の故事を引き反論、鐘の功徳を述べつつ鐘を撞く、語り舞という流れに、〈鐘巻〉の芸能の段（〔クリ・サシ〕～鐘入リ）との共通項を見出す。さらに、鐘を撞く動機に注目して、撞いた鐘の音によって迷いが晴れる〈三井寺〉と、鐘への恨みが誘発される〈鐘巻〉が「ポジとネガの関係にある」とし、〈鐘巻〉が〈三井寺〉を踏襲する可能性を述べる。また、〈舎利〉については「前シテの突然の変貌―作リ物の破壊―中入リ―謎の解き明かし（アイの段）―調伏」という展開が、〈鐘巻〉中入リ段以降とほぼ等しいことを指摘し、構想レベルで深い関わりがあると述べる。脚色方法の洗練の度合いから判断して、〈舎利〉が開拓した方法を〈鐘巻〉が踏襲したと結論付ける。

『国立能楽堂』の「特集」は、以下の六本が作品研究に関する内容。三田村雅子「二人の女の対戦―源氏能「碁」をめぐって―」（428。4月）は、原作『源氏物語』との差異として、能「碁」では空蝉ではなく軒端荻を碁の勝者とすること、軒端荻の心情にも言葉を尽すことを指摘し、こうした脚色によって「光源氏をめぐるなまなましい恋の駆け引きを盤上で

戦わそうとしている二人の女が浮き彫りにされる」と論じる。

竹本幹夫「能の祝言」(429。5月)は、祝言能と祝言謡の成立をめぐる論。脇の申楽について論じる「花伝第六花修」第一条に、祝言の語が見えないことに着目し「古くは脇能に祝言を必須とするという発想がなかった」と指摘。世阿弥が『花伝』から『風姿花伝』へと再編を行う段階、および幽玄能を目指して能の歌舞劇化を進める過程において、神が舞い御代を祝福する祝言能を生み出したと述べる。いっぽう祝言謡は、『申楽談儀』第七・十二条の喜阿弥の言説によって、世阿弥以前から「座敷謡の最初に祝言謡を一つ謡う」という習わしがあったらしいとする。

山中玲子「古作の能が教えてくれること―〈鵜飼〉を手がかりに―」(430。6月)は、古作と呼ばれる作品群が、世阿弥の改作の手を経て伝わっているという、世阿弥時代の複雑な改作状況を紐解きつつ、〈鵜飼〉における榎並左衛門原作と世阿弥改作について考察する。世阿弥による改訂の可能性がある箇所として、地獄の鬼が「心を和らげ」る形への改編を指摘(数年前に鵜使いに一夜の宿を借りた旨をいう、前場でのワキツレ僧の発言も、結末へ改編と連動する世阿弥の追加と読む)。古演出とされる前シテの鵜使いが後場に残る形は、すでに世阿弥の改作版には無かったとする。

大谷節子「能「班女」の技巧」(431。7月)は、花子の扇が持つ両義性に着目し、世阿弥が〈班女〉に盛り込んだ「面白尽く」の仕掛けを解き明かす論。「逢ふ義」の吉兆と、飽きて忘れられる女性、あるいは閨怨の情を想起させる「班女(班婕妤)の扇」の不吉、この二つの意味が変化し、一曲が展開すると指摘。狂乱の場面では「さて例の班女の扇は候ふ」の言葉によって、「逢ふ義」の証として取り交わしたはずの扇が「不吉の予兆の符号」に変わり、結末で「不吉の予兆」だった扇を少将と取り交わすことにより「逢ふ義」の吉兆へとふたたび転じて終曲を迎えると説く。さらに「怨歌行」で「合歓の扇」と詠まれる団扇が、夫婦和合の意味を持つことにも言及して、「「扇」が「逢ふ義」であることは和漢いずれにも典拠を持つ、揺るぎない吉兆であった」と指摘する。

小田幸子「『卒都婆小町』と老女の能」(433。9月)は、観阿弥が〈卒都婆小町〉で描いた「若さと老い、美と醜の対比」を継承したのが世阿弥で、「〈卒都婆小町〉の後日譚的意味合いのもとに」〈関寺小町〉を作成し、「亡霊の老女を主人公とした」〈檜垣〉を作ったと分析。さらに世阿弥は〈卒都婆小町〉を通して、老女の存在が「長い時間を内在した身体」であることを発見し、『風姿花伝』第三問答条々にいう「しほれたる風体」の実現を、〈関寺小町〉の「花萎れたる身の果て」、〈檜垣〉の「さも美しき紅顔の、翡翠の鬘花萎れ」で意図していた可能性を指摘する。

表きよし「能「望月」演能史」(434。10月)は、〈望月〉の資料・上演記録を辿る論。作者や成立時期が詳らかでない〈望月〉は、室町時代の記録が極めて少なく、天正十四年(天満本願寺での丹波猿楽梅若大夫の上演)が最古の記録で、その後、

記録が途絶えることから大和猿楽以外の地方猿楽の演目であった可能性を指摘する。江戸時代に入り、寛永六年の喜多七大夫長能による〈望月〉の復活をはじめとして、五代将軍綱吉時代に宝生流が復曲すること、寛政七年以前に観世流が、幕末にかけて金剛流・金春流が上演するようになること、明治期には金春以外が習として扱うこと等、〈望月〉が諸流の現行曲として定着する経過を通観する。

『おもて』に掲載された天野文雄「能苑逍遥」のうち演出・作品研究に関するものは以下の三本があった。「能苑逍遥（七七）『申楽談儀』十八条の『鐘の能』について」（『おもて』139）は、「近頃、将軍家御前にて、人の、『鐘の能』をせしに、南向きなるに、鐘を右の方に置く。左鐘に撞きしなり。いくたびも、左に置きて右鐘に撞くべし」と世阿弥が批判した鐘の撞き方（左鐘。左手で撞くこと）が、現行〈三井寺〉の演じ方であることをどう捉えるべきか検討する。下間少進の伝書・型付や『岡家本江戸初期能型付』が撞木で撞く形であることから類推して、世阿弥当時も紅緞の緒ではなく、撞木を用いていた可能性を指摘。その場合、目付柱前に置くと左手で撞くことになり、右手で撞くには脇座に置く必要があったとする。鐘を撞く方法が撞木から紅緞の緒へと変わったことで、右鐘・左鐘の区別がなくなり、鐘楼の場所が目付柱前に移されたと考察する。「能苑逍遥（七八）「休息」という型の来歴」（『おもて』140）は、〈関寺小町〉の休息（序ノ舞の途中でシテ柱に寄りかかる型）の成立と、〈鸚鵡小町〉〈姨捨〉〈檜垣〉〈木賊〉の老女・老人物の休息（下居する型）への波及に関する論。〈関寺小町〉の休息の成立を、高齢の鼻金剛が舞の三段目で目眩を起こしたことがきっかけと伝える『岡家本江戸初期能型付』の逸話を紹介。さらに、江戸初中期の型付では、「休息」の名称が定まっておらず「やすむ仕舞」「やすみ」「休足」等と呼ばれていたこと、また演技も、作リ物へ寄りかかる、柱に寄りかからず下居する等、一様でなかったと指摘する。さらに、ほかの老女・老人物への波及については、『喜多流宝暦型付』に常の形ではなく「休息スル時は…」「休足スルナラハ…」という形で確認でき、まず替の型として取り入れられたと述べる。「能苑逍遥（七九）『志賀忠度』の作者は禅竹なるべし」（『おもて』141）は、堂本正樹「番外曲水脈（一一四）禅竹関係の番外曲（二）志賀忠度」を補強する形で、同曲の作者禅竹説を支持する論。〈志賀忠度〉で和歌を「法身説法の妙文」とし「和歌はたんなる風雅の営みではなく、「法の道」に通じるものだ」と打ち出している点に注目する。禅竹晩年期の芸論『至道要抄』に「法心説法」の語が見えること、禅竹作の『杜若』、「作風が禅竹的である『東北』」にも「法身説法の妙文」の語があること、くわえて後シテを見た僧の詞に「軍体の姿のみえたまふは」と世阿弥の用語「軍体」も見えること等から、〈志賀忠度〉が禅竹作であることを確実視する。

以下は復元・新演出・番外曲に関する論をまとめる。野口隆行「大瓶猩々「酒の湧き上がる壺の作リ物」製作の記録」

（『能楽研究』43。3月）は、九条忠孝本転写『観世流作物之図』（法政大学鴻山文庫蔵）の〈大瓶猩々〉酒壺の復元・製作に関する覚え書き。二〇一八年度に開催した能楽研究所資料展示「能付資料の世界―技芸伝承の軌跡をたどる―」の展示物として企画したもので、本研究所から同氏へ製作を依頼した。この酒壺の特徴は、蓋を空けると酒が湧き上がるように見える仕組みで、完成図と寸法は記されているものの、壺内部の大小の波が立つ仕掛けについては詳細不明である。仕掛けの構造を推察し復元する過程の試行錯誤が綴られている。

田村良平「能〈玉井〉の再考・新演出について」（『明星大学研究紀要（人文学部・日本文化学科）』27。3月）は、二〇一八年二月二十八日開催の国立能楽堂企画公演「近代絵画と能―水底の彼方から―」で上演された〈玉井龍宮城〉の新演出に関する報告。新案の要点として、①豊玉姫と海龍王を両シテ扱いとすること、②彦火々出見尊（ワキ）の登場を〔半開口〕とせず〔名ノリ笛〕とすること、③豊玉姫・玉依姫より彦火々出見尊を上位の神格として扱うこと、④作リ物の工夫（龍宮城である小宮を一畳台に置き、ワキがそこに中入する）を示し、配役・面装束・作リ物・型と展開を記録する。

関屋俊彦「大西家所蔵番外曲〈豊崎宮〉等について」（『関西大学東西学術研究所紀要』52。4月）は、観世流能楽師大西家が所蔵する番外曲の一覧と〈妙法院〉〈稜威光〉〈豊崎宮〉の三曲の解題を記す。明治十六年七月梅若実の奥書がある〈妙法院〉は文久三年八月の政変で尊王攘夷派の公家七名が長州へ逃れた事件を扱う内容。『梅若実日記』には〈妙法院〉に関する記事が散見され、明治十六年八月五日条に〈妙法院〉を七卿の一人である三条実美の前で披露した旨が記されていること等を指摘する。〈稜威光〉は、奥書は無いが戦意高揚の目的での新作と見られ、神功皇后・武内宿祢・新羅王などが登場する点で高木半作詞・観世清廉作曲〈三韓〉に近く、生田秀と高木半の関わりを考察する必要性について言及する。〈豊崎宮〉は入江来布作詞・大西信久作曲で、孝徳天皇を祀る豊崎神社に関する内容と紹介する。

最後に、ロームシアター京都『ASSEMBLY』からレビュー二本を取り上げる。横山太郎「能であることの先へ―ミュンヘン・カンマーシュピーレ『NŌ THEATER』」（ISSUE 03）は、「能の幽霊を批評的に再発明した」作品と『NŌ THEATER』を評価する。同作は、ドイツ・ミュンヘンの公立劇場である「カンマーシュピーレ劇場」の委嘱を受けて、二〇一七年に岡田利規（チェルフィッチュ）が作・演出したもので、二〇一八年七月六日（金）～八日（日）ロームシアター京都サウスホールにおいて日本初演の運びとなった。岡田が複式夢幻能形式かつ小段を意識した戯曲構造を採用したこと、能「六本木」・狂言「ガードレール」・能「都庁前」の三番構成に現代の最も一般的な公演形態が踏襲されていること等から、「形式的にいかにも能らしい」手法を取っていると横山は指摘する。この手法であるが故に『NŌ THEATER』が「「能らしさ」からの離脱」しはじめると、観客自身が持

つ「能らしさ」との差異を強く意識させられ、その結果、観客が「能らしさ」とは何かという問いに直面するとし、横山は「人々が「能らしい」と考えることへの批判として機能している」と岡田の目論見を分析。また、「「能らしさ」からの離脱」は「幽霊のありよう」に顕著で、「能らしい」幽霊がワキへの鎮魂と成仏を求めるのに対して、『NŌ THEATER』の幽霊たち（能「六本木」は世界金融危機で自殺したディーラーの幽霊、能「都庁前」は都議会でのセクハラ野次に関する抗議で広場に立つ女に憑く「フェミニズムの幽霊」）は、「経済や政治ゆえの幽霊」であり「能らしい」鎮魂・成仏を求めていないと指摘。『NŌ THEATER』は、「全社会のコンフリクトを代表した集合的存在としての幽霊」、「社会的な心性や情勢の集合体としての幽霊」を新たに生み出したと横山は結論づけている。

原瑠璃彦「枯山水としての能舞台―シリーズ 舞台芸術としての伝統芸能 vol.2 能楽『鷹姫』」（ISSUE 04）は、二〇一九年二月三日（日）ロームシアター京都サウスホールでの上演に関するレビュー。所作台や柱を立てないという能舞台をまったく意識させない空間で上演されたにも拘わらず、「濃密な演能空間」となっていたことの理由を、原は地謡の役割を果たす「岩」に見出す。『鷹姫』における「岩」が「人間や動物と異なり、ほとんど時間を超越しているかのような存在であるということと、能楽において、地謡が登場人物と同一平面上に座しながらも別次元の存在であるということを重ね合わせて考えることも可能」と分析。さらに、日本の庭園研究を専門とする視点から「岩たちが舞台全体にバラバラに配置されて座っている。そしてその岩たちが、人間の営みを傍観しながら語り合っているという状況」を「ひとつの枯山水の庭」として捉える。橘俊綱が『作庭記』にいう作庭の根幹「石を立てる」（まず主石を立て、それが乞うように次の石を配置する）に同じく、今回の『鷹姫』においても「岩たちのポリフォニーが成立」しており、それによって「劇場空間において緊張関係を保った能楽を成立させることができた」と見る。（深澤）

【狂言研究】

まず資料紹介・資料研究から。佐藤友彦・野崎典子・林和利・安田徳子・米田真理「狂言共同社『秘傳聞書』翻刻（十）」（『名古屋芸能文化』29。12月）は、和泉流山脇派の伝書『秘傳聞書』の翻刻の連載。今回も「秘傳聞書　肆」の下の翻刻。釣狐・朝比奈・釣針・いとし若衆・縄綯・膏薬煉・宗論・二人袴・舟弁慶間などに関わる記事。同誌には、同じく連載の米田真理・雲形本研究会「豊橋市安海（やすみ）熊野神社蔵狂言伝書の性格［三］」も掲載。今回は、現金屋の屋号をもつ俳人・五束斎木朶から一代か二代後の世代となる古市音蔵の狂言台本（三十七番）の紹介と考察。この台本はいずれも音蔵が演じた曲・見た曲らしく、詞章の系統は雲形本系と波形本系が混在すると考察されている。山本晶子「馬瀬狂

言資料の紹介(11)―「今神明」―」(『学苑』939。1月)も連載の資料紹介と考察。今回は、馬瀬文化二年本《今神明》の分析。本曲には、参詣人を二組とする天理本グループ、一組とする和泉家古本グループ、結末や様々な趣向が異なる和泉流密書の三グループがあることを示した上で、馬瀬文化二年本は和泉家古本グループのうち、宗家系本に最も近いと位置づける。飯塚恵理人「佐藤友彦師所蔵 九冊本間狂言「応答」」(『椙山女学園大学研究論集人文科学篇』50。3月)も和泉流狂言師佐藤友彦氏所蔵資料の紹介の連載。今回は、四番目・五番目物を中心とした四十曲ほどの間狂言の翻刻。安藤万有子「東洋文庫所蔵河鍋暁斎筆《狂言始》に関して」(『東洋文庫書報』50。3月)は、河鍋暁斎筆と判明した小判錦絵揃物『狂言始』の紹介と他館所蔵暁斎筆狂言絵との比較。本資料は、鎌腹・梟山伏・瓜盗人・悪坊・釣狐(2枚)・萩大名・蛸・木六駄・首引・夷毘沙門・鬼の継子の十二枚。絵写真・他館蔵暁斎筆狂言絵比較表付き。佐野佳那実「上方絵本『桃太郎』考―狂言『節分』の取り入れ―」は国会図書館蔵『絵本あつめ』に所収されている草双紙『桃太郎』の紹介。桃から手足が生える、姉が節分の日に鬼に掠め取られる点などから、〈節分〉との接点を指摘する。大蔵虎光本に依っているなどの考察は再考の余地があるが、興味深い資料の紹介であった。

狂言史関係は二本。天野文雄「風流(狂言風流)の歴史と『大黒の風流』」(『おもて』142。9月)は、大槻能楽堂リニューアル記念公演で上演された三番叟の風流の一つ、〈大黒の風流〉の考察。「寄せ風流」とも呼ばれた風流付き〈翁〉の歴史を外観し、江戸時代の〈大黒の風流〉は幕府の晴れの催しでは上演されず、禁裏や仙洞での上演例があることや、大黒の眷属の鼠が和泉流では六匹、大蔵流では十二匹も登場した事例を紹介する。早乙女牧人「鷺流狂言師矢田蕙哉:関東空也にまつわる石碑小考」は明治初期吾妻能狂言にも関わった鷺流狂言師・矢田蕙斎周辺の研究。百花園にある「矢田蕙哉翁之碑」に見える人物の考証、東京都公文書館「情報検索システム」と新聞記事を用いた吾妻能狂言とそれ以降の鷺流の動向の調査、関東空也門徒の面からの考証からなる。蕙斎自身の考証は資料数の壁もあるだろうが、能楽資料や能楽研究に彼や吾妻能狂言に関わるものはあるので、それらも踏まえる必要があるだろう。歴史研究ではないが、明治期に作られた児童向け新作狂言を論じた藤本芳則「中川霞城の狂言―『少年狂言二十五番太郎冠者』を中心に―」(『大谷学報』99―1。11月)もここで扱う。とくに明治中期の児童文学者・中川霞麗(霞城山人)の『太郎冠者』を中心に論じ、諷刺・教訓という特徴を備えること、冠者物だけでなく女狂言・鬼狂言からの影響もあることを指摘し、「古雅」な文体による洒落が面白さを生んでいると考察する。そのほか、霞城以外の新作狂言も紹介する。これまで、ほとんど気に留めなかった分野だったので、興味深く読んだ。霞城よりも知られているお伽狂言についても先行研究が多いとは言えないので、こうし

た狂言の受容は、狂言史の一側面としてさらに検討すべきだろう。

次に作品研究。大谷節子「狂言「挂杖」と『無門関』第四四則「芭蕉挂杖」」（『成城国文学論集』41。3月）は、僧と亭主の問答の二重性を読み解く論。僧の「漆無ければゑ塗らずして」という言葉と亭主の鼻を撫でる行為は、『無門関』第四四則「芭蕉挂杖」の公案を元にすれば、二元論を超えた悟りの有無を問う問答と解することができる。また「一念はつぐと二念はつかじ」も禅の解釈を基にすれば悟りに余念がないことの意となると考えられる。その上で、即物的で現実的な考えしか持たない僧の発言を、亭主が禅的に解釈してしまうという二重性に、本曲の「をかし」を見る。特に「漆無ければ…」は、引用されている『無門関』の注釈書や本論を読んでも、一読では理解が追いつかないほど難解であった。こうした狂言の作者や享受者はどのような人たちであったのか、という問題の重要性を感じた。同じく禅に関わる問題を扱った論として、原田香織「狂言『花子』における坐禅という仕掛け」（『東洋学研究』56。3月）がある。〈花子〉の前半で、逢瀬のアリバイとして、連歌会・茶会などではなく、なぜ坐禅を設定したのかという問題意識のもと、仏道を設定することで夫の行為の罪悪感、背徳感が強調され、妻の倫理的な正義が明確になると読む。論の中で、夫の一人語りが詳細に分析されているが、前半の宗教的論議の厳かさに対して、後半の遊女との逢瀬の語りが歌の世界で構築されていることがよくわかる。鈴木靖「狂言「鏡男」考」（『能楽研究』43。3月）は、〈附子〉に続いて狂言の源流を中国笑話に求める論。近似性を妻に命じられ都へ下人を買いに行く設定や、留めの設定から、〈鏡男〉に近似する天正本〈松山鏡〉と敦煌本『啓顔録』との近似性を指摘し、〈鏡男〉の天理本や虎明本との比較を通して、夫婦の争いの物語へと変化する過程を論じる。確かに『啓顔録』との類似性を見て取れるが、直接的な影響関係を想定できるかが問題だろう。鈴木稿では、文献を通しての影響を明らかにできないとする一方で、中国・韓国・日本における民間交流の中での伝播の可能性を論じているが、この「交流」をより具体的に把握することに、こうした研究の難しさがある。稲田秀雄「狂言「石神」の構想と演出：石神信仰との関連」（『朱』62。3月）は、石神信仰から狂言〈石神〉を読み説く。妻は夫と添いたくないのに、「添えなば上がれ」と小歌を謡う型を古態と考え、この齟齬は石神信仰の通念に規制されていると読む。すなわち、夫婦和合や吉凶を占う神であった石神〈夜叉神・道祖神〉は、重い石が上がる奇瑞によって神意を表出するのであり、「上がれ」と祈るのが本来の形であり、〈石神〉はその信仰形態に従い作られていると考える。本論の中心的内容ではなかったが、論中に触れられている狂言における「変装」「入れ替わり」の趣向との関係も重要な指摘である。『銕仙』は狂言の論考を二本掲載。田口和夫「狂言〈木六駄〉三題―雪・喜三太・鶉舞―」（689。2月）は、大雪の設定は江戸中期に和泉宗家系で工夫されたこ

と、「木六駄」は『義経記』における義経の馬引役の「喜三太」を念頭においた秀句であることを指摘し、明治期における鶉舞の技芸伝承についてまとめる。一つ目の指摘からは、台本の丹念な読み直しと諸本比較の重要性を改めて教えられた。岩崎雅彦「磁石の正体」（693。6月）は先行研究の指摘を整理した上で、「わざわひ」ではなく「磁石」としたところに狂言の工夫があること、太刀を飲もうとする設定は延慶本『平家物語』に近いこと、詞章上では怪獣から精へと変化したが、演技とのアンバランスがあることを指摘する。作品研究ではないが、武蔵野大学能楽資料センター公開講座「美味しい能・狂言」に含まれる狂言関係の記録にもここで触れておく（『能楽資料センター紀要』30。3月。狂言以外は【その他】参照）。野村又三郎・網本尚子「美味しい狂言」は対談の記録。柿の今昔、〈附子〉〈苞山伏〉の演出の違い、〈茄子〉の復曲など、話題は多岐に及ぶ。狂言と食べ物の関係の深さを再認識できる。中山圭子「狂言に見られる菓子」は菓子の歴史を中心に、それに関わる曲に見られる菓子の分析。水菓子として〈菓争〉、砂糖として〈附子〉、点心の一つとして温糟粥に注目して〈文蔵〉、饅頭に注目して〈饅頭〉、餅に注目して〈岡大夫〉に言及する。〈菓争〉の筆頭として橘が置かれている意義など、専門家ならではの指摘も含まれる。また放鷹制研究者の小池豊が鷹狩に関する狂言〈政頼〉を中心に紹介した「狂言にみる鷹匠」（『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』47。4月）もここにあげておく。

国語学・言語学に関わる論は四本。小林千草「成城〈甲〉本「籔屑」の性格・用語と『和泉流秘書』」（『近代語研究』21。3月）は、成城大学図書館蔵『狂言集』に関する一連の研究。今回は、指定辞「ぜあ」が見られる特徴から、雲形本と関係が深いと考えられる成城〈甲〉本のうち、雲形本未所収の〈籔屑〉と愛知県立大学図書館蔵『和泉流秘書』との比較を中心とした論。波形本・三百番本などとも比較をし、本文の性格を詳細に分析する。先行研究で指摘されていた「『和泉流秘書』が雲形本の前段階の位置にある」という見解への反論を含む。『和泉流秘書』の性格については、他曲の検討結果も俟ちたい。同氏には同資料に基づく「成城〈乙〉・〈丙〉・〈丁〉本所収「地蔵舞」の性格と用語」（『湘南文学』54。3月）もある。三本に所収されている〈地蔵舞〉の詞章系統を分析し、〈乙〉本は全体的に雲形本に近く、〈丙〉本の前半は波形本に近く、後半はそれとやや距離があり、〈丁〉本は大蔵虎光本系統に近いとする。さらに同氏には、標題の一句が定型句として脇狂言・大名狂言・小名狂言に定着する過程を考察する「狂言台本の「天下治りめでたい御代なれば」考」（『国語国文』88–8。8月）がある。大蔵流では、虎寛本の段階で、花見・茶の湯や都の繁栄の様子を語る場面にこの一句が用いられるようになり、和泉流・鷺流にも広がっていく。その背景には、徳川の治世の安定があると分析する。類似場面における台詞の統一化の一例として興味深いが、虎寛本が書写された時代に徳川の治世の安泰を見るのは、異論もあるだろう。山際彰

「近世・近代の口語語資料における時を表す語彙：狂言台本と落語速記資料を中心に」（『國文學』103。3月）は時を表す語彙に注目した国語学的分析。落語の分析を中心とした論であるが、近世語の代表として大蔵虎寛本を取り上げ、相対時（発話時を基準時とする語彙）については「最前」「夜前」が多いこと、絶対時（太陽の運行を基準時とする語彙）については種類が豊富であることなどを指摘する。言語学的・国語学的研究ではないが、『日本語学』（38。6月）には「笑いとことば」という特集が組まれ、狂言に関わる論が二つ所収されている。二論とも論文というより、専門外の人に向けた狂言の概説に近い。長島平洋「ことばと笑いと狂言と：ユーモアのあるセリフのハイライト」は狂言の台詞にはめでたさ・リズム・ユーモアの三要素があるとし、主にリズムとユーモアに関わる例を紹介する。田口和夫「古典芸能のことばと笑い：狂言、ことばに依る笑い」は言葉に注目し、歴史的視点からその笑いの要素を概説し、ことばによる笑いの類例を紹介する。「附子／留守」の秀句の構想があるからこそ、「毒」ではなく「附子」と設定したという指摘などは興味深い。

教育面の論考は一本。ウィリアム・ペトルシャック 飯塚恵理人「英語圏留学生向け狂言鑑賞教材の作成―《松囃子》を素材に」（『名古屋芸能文化』29。12月）は、《益山》《仏師》に続いて、《松囃子》の詞章の英訳。底本は佐藤友彦氏蔵本。この曲の翻訳には、わかりやすい狂言だけでなく、外国人に向けて「言霊信仰」を紹介したいという意図があると述べられている。これ以外に、狂言と関わる教育関係論文が二本あるが、【その他】参照。

最後に、狂言と現代芸術の関連を論じた一本。平林一成「『シン・ゴジラ』における狐と蛇―野村萬斎の「熱線」の演技を中心に」は、映画「シン・ゴジラ」のゴジラのモーションキャプチャーを担当した野村萬斎の演技プランの考察。ゴジラの造形には、〈釣狐〉が用いられたが、野村万作の最後の〈釣狐〉で構想された神格化された狐が援用され、型として練り直されたと考える。さらにゴジラの演技の眼目である「熱線」では、能のイノリや八岐大蛇の「八鹽折の酒」が取り入れられたことを分析する。制作側から公言されている情報なのか、平林氏が分析したことなのかが一読して分かりづらい箇所もあった。論文より萬斎氏へのインタビュー（もしくは対談）の形をとったほうが、論文の目的を達成するのに合っているのではないだろうか。（伊海）

【その他】

■教育

教育関係の論考から。小学校における狂言を教材とした取り組みの報告が2つ。小林和馬「古典芸能を活用した小学校の伝統的言語文化の授業：狂言の「語リ」〈奈須余市語〉、平曲「那須与一」を通して」（『横浜国大国語研究』37。3月）は、テキストだけでは児童には難解な古典教材『平家物語』を理解するために、それを芸能化した狂言と平曲を活用した

授業の実践記録。古典に親しむ授業が単にわけもわからず暗唱するだけになることへの疑念から、映像を繰り返し見ることの効用を示す。奈須余市語は野村万作の映像を使った由。大橋直義「小学校国語における狂言「柿山伏」：異文化理解にむけて」（『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』69。2月）は、古典テキストが現代的読解に対してもつ他者性を重視し、歴史的文脈のなかで解釈すべきことを主張。教育現場における「柿山伏」の読み方を例にあげ、次のような問題提起をする。中世における柿の木の高さや、説話における天狗と山伏の類型性を無視した現代的理解によって、児童は自文化の地平で「明るい笑い」としてこの作品を解釈するにとどまっているのではないか。

高等教育では、まず山本宏子、根岸啓子、根岸弘による「岡山の民話に基づいた能・狂言の学習」（『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』170。2月）から。平成28年から3年間にわたって開講された岡山大学教養教育科目「能楽入門」の実践記録である。国内外の大学においてワークショップ型の能・狂言の授業がおこなわれる機会は珍しくない。そのなかでこの取り組みがユニークなのは、岡山の民話に基づいた能・狂言の創作劇を学生が演出・実演するところだ。決まったわざをやってみるということを超えて、創造的なプロセスに参与することで、能狂言の仕組みについての学生の関心や理解が深まっている様子が伝わってくる。末尾に資料として掲載された台本は、同様の試みを考えている教育関係者の参考になるだろう。

次に日本語教育。森川結花は甲南大学総合研究所のプロジェクトで、外国人留学生への日本語教育において伝統文化を活用することを念頭に、茶道藪内流の福田竹弌と観世流シテ方の上田宜照にインタビュー調査をし、両者を講師に日本語教師向けワークショップをおこなった。「日本語教育における伝統文化をテーマとした異文化理解プログラム開発の可能性」（『甲南大学教育学習支援センター紀要』4。3月）はその報告。日本語教師が「自分には伝統文化はわからない」と尻込みし、深い異文化理解へと導くような教育がなされにくい現状にあって、そうした状況を変えていく体験学習プログラムの可能性を示唆する。同様の留学生教育の実践報告に深川美帆「「能楽」をテーマとした体験型日本文化学習のコースデザインと授業実践」（『第5回スペイン日本語教師会シンポジウム発表論文集』）があった（こちらは短文のレポート）。

■受容

『石川工業高等専門学校紀要』51（3月）が、昨年に引き続き吉本弥生と佐々木香織による三島由紀夫『近代能楽集』の共同研究の成果を掲載。吉本稿は原曲受容にわずかに触れるものの、概ね近代文学研究の枠内にあるので省略。佐々木稿「能《卒都婆小町》における冥顕構造」は、昨年の葵上論に引き続き冥顕概念によって能を分析しようとする。ただし、前稿は大隅和雄の『愚管抄』解釈に基づく冥顕概念を採用して

これを能楽作品に適用したのだが、著者は森新之介による大隅解釈への批判を知って反省し、むしろ中世的世界観を明らかにする発見的概念としての「冥顕」を、能楽の作劇・上演形式に基づいて再定義することを目指す。具体的な分析対象が、冥顕の境界的な現象である「憑物」の能『卒都婆小町』だ。著者によれば、本作において冥顕の境界が露呈する瞬間は、小町と僧の問答において「小町と名乗った老女が小町の元に通うためと称して物をねだったとき」、すなわち対話が可解から不可解へ遷移するときである。こうした瞬間の意味づけは社会的文脈によって異なるものの（現代なら精神病で当時なら憑物）、不可解な異常状態であることは確かである、と著者は指摘する。しかし、本稿がその異常状態を冥顕の境界と呼ぶことで、中世の世界観の理解に、あるいは卒都婆小町という作品や能というジャンルの理解に、どのような進展があるのかは、十分には示されていないように思う。なお、本稿は内容的には「作品研究」の欄にあげるべきものだが、昨年から続く研究プロジェクトの成果であることに鑑みて、昨年と同じ「その他」で紹介した。近代能楽集関係では、ほかに宮田慶子らの近代能楽集「綾の鼓」をめぐる鼎談があり（「アフタートーク 近代能楽集「綾の鼓」をめぐって」『三島由紀夫研究』19。5月）、原曲との関係に多少言及している。

日置俊次「夏目漱石と能：素人としての自己劇化」（『青山学院大学文学部紀要』60。3月）は、謡を習い、作品世界への能の影響も指摘される夏目漱石について、かれの能へのアプローチの裏面に水のイメージと結びついた死への恐れが存在したと述べる。それを示すものとして、妻の入水自殺未遂と流産、小宰相の局の入水を扱った能『通盛』を好んだこと、『草枕』に反映したミレーの絵画『オフィーリア』の印象、藤村操の投身自殺へ感じた責任、といった諸事例があげられる。著者によれば、漱石が能を扱う際にそうした「水と死」の強迫的な観念に対してバランスを取ったのが、自分を素人愛好家として戯画化するユーモアの感覚であり、それは能に対する狂言のバランスに似ているとされる。こうしたバランスをよく示すのが『吾輩は猫である』と『行人』だ。前者では、漱石の熊本時代の謡初心者経験を戯画的に反映させる一方で、結末部では語り手の猫が溺死する。後者では、漱石の経験を彷彿とさせる素人の謡会の様子を描きながらそこで謡われるのが悲劇的な能『景清』である。これらを踏まえ、漱石の文学行為をワキの供養のようなものとして捉えようとする結びからは、大きな示唆を得た。しかし、著者自身の先行研究で示されていたのかもしれないが、本稿の行論では漱石の内面が強い根拠なしに推定されるところが見受けられ、漱石が注目した能が水に関係するという説についても、十分には納得できなかった（たとえば『景清』はことさら水の能とは言えないだろう）。

■国立能楽堂

国立能楽堂が開館35周年を迎えたことについての記事がいくつか。『楽劇学』26号「ぶたい」欄では、金子直樹が約

１８００回を重ねた主催公演の意義を、稀曲上演、多様な能楽師と出会う機会、復曲・新曲制作の三点に整理して評価。松本雍は能楽堂の養成事業の歴史と意義をまとめた。福原秀郎と松本雍の対談「国立能楽堂開場35周年を迎えて」（『観世』86–2。2月）は、前述の内容のほか、資料展示や字幕などにも触れ、この間の能楽堂の取り組みを概観するのに便利。

■経営学

職業人としてのスキルとキャリアを形成していく途上で、成長の実感を得ること――いわゆる「一皮むけた」経験をすること――は非常に重要である。それはいつ・どこで、いかにして実現するのか？こうした人材育成の一般的な問題関心から、西尾久美子が能楽師のキャリア形成を論じたのが「伝統的文化専門職の一皮むけた経験：能楽師の事例」（『現代社会研究科論集』13。3月）。ビジネスパーソンにとっての海外転勤に相当するような「一皮むけるための状況」とは何かという視点が新鮮。先行研究の検討とインタビュー調査をふまえ、固定的なイメージで捉えられがちな「家元制度」の、実際には動的で柔軟な人材育成の諸段階が分析される。内弟子、独立後、重習に挑む時期といった各段階で、師弟関係、指導内容、そのときどきの「挑戦」（特定の上演曲）がシフトしていき、一皮むけるための状況をセットする仕組みが存在することを明らかにしている。著者はまた、「挑戦」した経験と一皮むけた経験とが必ずしも一致せず、周囲からキャリアの節目と思われることと、個人がキャリア形成上重要だと感じることにはズレがあるという指摘をしており、面白く感じた。

■食と能楽

三浦裕子「食べる喜び・食べる悲しさ」（『武蔵野大学能楽研究資料センター紀要』30。3月）は、同センターの公開講座「たべものアレコレ能・狂言」の講義録。能・狂言における食べる行為の表現を概観する。食べものや食べるシーンをリストアップした資料がありがたい。狂言には食べものも食べる場面も豊富に出てくるが、能では『国栖』と『雷電』（及び改作した『来殿』）くらいしかないという指摘は、言われてみればなるほどと納得する。また、関連して「飢え」や「殺生」や「食物を得る労働」までひろげて、関連する能をあげている。同号には、西中道と徳永健太郎による講演録「食と罪：放生会に見る宗教的「解決」」（司会羽田昶）も掲載されている。能『放生川』の舞台となる石清水八幡宮の禰宜で研究所研究室長でもある西が、放生会の歴史と構成を紹介、仏教行事から神仏習合の儀礼となり、さらに明治の神仏習合で現在の形になったことを説明した。続いて中世史研究の立場から徳永が、室町幕府（その最高権力者「室町殿」）と石清水八幡宮の関わりを語った。八幡信仰や殺生禁断の思想の高まりを受けて、義満から義持にかけての時期に石清水八幡宮と放生会が京都でクローズアップされていったという。石清水八幡宮を舞台にした『放生川』『弓八幡』を世阿弥が作ったり、殺生禁断をテーマにした『阿漕』『鵜飼』『善知鳥』

のような能が生まれたりする背景がよくわかる。

■表象文化

「洲浜」とは、洲が曲線を描きながら出入りする浜辺のこと。それを模した飾り物「州浜台」が作られたり、絵画、庭園などでしばしば描かれたりして、祝賀的な意味をもった。そこには多くの場合松の木が組み合わされ、いわゆる「白砂青松」の理想的な海辺の表象が形成された。原瑠璃彦「海辺の松風と波音：州浜の音をめぐって」（『青山総合文化政策学』10。9月）は、日本文化においてこうした州浜が表象されるときに、人々はそこでどのような音を想像的に経験したのか、というユニークな問いを探求する。結論から言えばそれは松風の音である。その具体相として、和歌の諸例と『源氏物語』と並んで、能『高砂』『箱崎』などが分析される。これらの分析の出発点は植木朝子の論考で、植木は自然音である松風を琴のような楽器音にたとえて認識することを「聞きなし」と名付け、これが和歌よりも今様・平曲・謡曲といった芸能の場に現れやすいと指摘した。著者はこの観点から世阿弥の脇能における海辺の音風景に注目する。すると『高砂』は、海辺に音楽ないし歌として聞きなされた松風が吹き、そこが聖地と化すことを軸としたドラマとして解釈でき、州浜の表象の系譜に加えられるべき作品に見えてくる。そのことはその後の『高砂』受容からも言える。近世の婚礼の場では『高砂』の祝言謡が謡われ、そこには島台（州浜台の末裔）が出され、しかも島台のモチーフに『高砂』が用いられたという。著者によるこのあたりの仮説提示と例証は実に面白い。最後の『箱崎』その他の脇能の分析では、それらも海辺で松風の音（と波音）が鳴り響くのを観客が想像的に聞くような作品であることに改めて気づかせ、さらにそこに見られる「自然音がそれ自体仏の法の声である」という本覚思想の表現が、中世に浄土世界の表象として州浜の図像が用いられるようになったことと関連していると示唆する。このように、本稿は能楽研究の側だけから見ても、世阿弥の脇能の作品世界における自然音がどのような意味作用を伴って想像されるのかを文化史的文脈から論じるという、極めて斬新なアプローチによる研究として高く評価できる。（横山）

【外国語による能楽研究】

◎単行本

○ Pinnington, Noel John. *A New History of Medieval Japanese Theatre: Noh and Kyōgen from 1300 to 1600*. Cham: Palgrave Macmillan.（ノエル・ジョン・ピニントン『中世日本の演劇史：一三〇〇年から一六〇〇年にかけての能・狂言』）

能・狂言の発生から一六〇〇年頃までの変遷を詳述する本書は、過度な歴史の単純化を避けつつも、日本語・日本文化の知識を持たない読者を想定した丁寧な説明が特徴的である。今日残る記録がかなり限定的である事に読者の注意を促し、様々な仮説を紹介した上で、著者自身が蓋然性が高いとみなす説を展開する、という形をとっている。基本的な構成は時

系列に沿うが、代表的な作者、作品ジャンル、個々の作品、演出面の説明も豊富である。参照された翁猿楽の先行研究が古いことが惜しまれる。章立ては以下の通り。

第一章　室町時代の日本
第二章　能の先駆者
第三章　初期の能とその礎を築いた人々
第四章　世阿弥時代の能
第五章　古典的な能作品
第六章　混乱期の能　一四五〇～一六〇〇
第七章　中世の狂言

◎論文

○ Fujita, Takanori. “Layers and Elasticity in the Rhythm of Noh Songs: Taking Komi and Its Social Background.” In *Thought and Play in Musical Rhythm: Asian, African, and Euro-American Perspectives*, edited by Richard K. Walf, Stephen Blum, and Christopher Hasty, 212-231. New York: Oxford University Press.（藤田隆則「能謡のリズムにおける多層性と柔軟性：コミとその社会的背景」）

拍間が伸縮する平ノリ謡と囃子の関係を分析する。時に謡に協調し、あるいは謡から離れて進む囃子においては、「コミ」が自律的な演奏の鍵であることを明らかにし、謡の従属物という立場に対する十九世紀から二十世紀にかけての囃子の反発が、この「コミ」の発展の背後にあるのではないかと指摘する。なお、当論文を所収する書籍のウェブサイトで、例示された謡や鼓の演奏箇所を実際に聴くことが可能。

○ Jackson, Reginald. “Desiring Spectacular Discipline: Aspiration, Fraternal Anxiety, and the Allure of Restraint in Nō’s *Dōjōji*.” *Asian Theatre Journal* 36, no. 1: 49-78.（レジナルド・ジャクソン「驚異的な鍛錬を望むこと：野心、男性社会の不安、そして能「道成寺」における抑制の魅力」）

女人禁制の場への侵犯と懲罰を描く能「道成寺」は、同時に、専ら男性から成る能社会への役者の入会儀式的役割をもはたしている。物語世界と能役者を取り巻く状況という複数のレベルにおいて、「男性社会（男同士の絆）」が芸能者に課す圧力をこの作品が顕在化させていることを、ジェンダー論的分析によって指摘する。

○ Pellecchia, Diego. “Time in Noh Theatre performance and Training: Conversations with Udaka Tatsushige.” *Time and Performer Training*, edited by Mark Evans, Konstantinos Thomaidis, and Libby Worth, 43-49. New York: Routledge.（ディエゴ・ペレッキア「能の上演と稽古における時間：宇高竜成との対話」）

能の上演をめぐる様々な「時」概念を概観する。上演演目と四季とのかかわり、一曲中の序破急、劇世界内で自由に伸縮する時間、上演と申し合わせの一回性、幼少期から一生を

通して続く訓練と、（にもかかわらず多くのシテ役者にとっての）シテを演じる機会の希少性など、取りあげられる特徴は多岐にわたる。

○ Rogals, Alex. “Trapping the Heron: The Curious Case of Sagi School *Kyōgen*.” In *Asian Theatre Journal* 36, no. 1: 189-204.（アレックス・ローガルス「鷺を罠にかけて：鷺流狂言の数奇な事例」）

山口県における鷺流狂言の現在にいたるまでの伝承の変遷を、先行研究と実地調査をもとに詳説する。明治末期以降の、家元制度をもたず能楽協会にも所属しないこのグループの伝承・普及活動の核にあるものが、山口という地域への帰属意識と、地域文化の振興保存という意識であることを、明らかにする。（竹内）